



求道

第八號

第五卷

(行發日一圓一月每行發日一月八年一十四治明)

(可認物便郵種三第)日二十月一十年十四治明

求道第五卷第八號目次

求道

◎人生唯如來を信ぜよ

◎他力信仰の淵源

一 佛教と念佛(上)

感謝

◎高松講習會 ◎鹽飽島 ◎極樂寺講話 ◎明石神戶

講話

◎光明名號の因縁 『執持鈔』講話の二

近角常觀

第四章

第五章

告白

◎智眼闇しと悲む勿れ

小笹熊谷

◎歎異鈔 第九章 近角常觀

歎 咏

◎秋思(長詩)

増田八風

◎五月雨(短歌)

増田八風

時報

◎大日本佛教青年會夏期講習會 ◎第二夏期傳道 ◎第三夏期傳道

每日曜午前九時

求道學舎

〔本郷森川町一番地〕

毎土曜午後二時

第二求道會

〔九段坂佛教俱樂部〕

毎月二日午後七時

第三求道會

〔日本橋蛸殼町説教所〕

講開リヨ曜日三第月九

求道

第五卷 第八號

人生唯如來を信ぜよ

吾人は如來盡十方無碍光の大悲を蒙りつゝ人生に生活する。これ人生の眞意義を覺りたる者也。然るに吾人生來此大悲を認めずして、徒に凡夫小智を以て人生をはからひ利己我慾を中心として醉生夢死する者は迷へる人生に非ずや。嘗に生來然るのみならず、久遠劫來かくの如くにして終に今日に至る、これ所謂無明の長夜なるもの、人生流轉の根本洵に茲に在り、如來は本來常覺常醒の境にましくてかくの如く迷へる人生を憐みたまひ、盡十方無碍の大悲を以て常に我等を呼び醒ましたまふ、是實に本願招喚の勅命也。されど吾人迷妄の甚しき、常に此大悲を蒙りながら、猶之を覺らず、徒に生存の爲め、私慾の爲め、狭小なる知識を標準とし、淺薄なるはからひを恃み、敵なきに敵を作り、自他なきに自他を構へ、遂には功名富貴の空中樓閣を築き、修羅争鬪の人生を現出し

て益、如來慈父の親心に背きたてまつること甚し。此に於てや大悲の心やるせなく、諸の善巧方便して我等をして其光を仰がしめたまふ。人生に於ける出來事は畢竟此如來の親心を知らしむるの方便たらざるはなし。かくの如く大悲窮まりなき願心は遂に吾人無明の迷を離へして初めて慈光を認めしめたまへる一念、正にこれ吾人か心中信樂を獲得せる時尅にして、亦これ初めて盡十方無碍光に攝取せられたるの時也。即是迷へる人生を脱して醒覺の人生に入れるなり、極言すれば、人生の眞意義を自覺せる者にして久遠已來の罪惡を回へして如來慈父の重愛を蒙れる新たなる眞の佛子となれる也。

世の所謂人生は誤れる人生也、迷へる人生也、囚はられたる人生也、縛せられたる人も。吾人初めて如來の招喚に覺め如來の慈光に照らされたる時、自覺せる人生に入るなり、自由なる人生を得る也、眞正なる人生に住する也。既に如來の力を認め、如來の子となる、人生須らく唯如來を信すべし、是強て信する非ず、信せざるべからざる也。親として子を知らざるの理あらんや、子たるもの、すべてのはからひと小智とを投げすて、唯如來の親を信ぜよ、佛天は必ずよきに御はからひたまふ也。

然れども吾人は如來の淨國に生れざるかぎりには絶対に煩惱の繫縛なしとは言ふべからず、恰も囹圄に繋れつゝも親の心を認めて、心家庭に通へる囚人の如し、未だ如來の國に生れざるも、何時にても生れ得る人となれる也、即得往生とはこの事也、されど生れざる限りは未だ眞解脱とは言ふべからず、眞解脱ならざる人は、時々煩惱に繫縛せられて人間のはからひに立歸ることあり、これ佛子の心すべき所也、世人は誤る人生の立場を以て畫策云爲して凡夫のはからひを以て人生を律せんとする事あり、猶囹圄にある囚人は心自由を得も時として囚人の根性を免るあたはず、吾人幸に如來重愛を蒙れる佛子にてありながら動もすれば、さもしき囚人根性に同化して、淺慮なるはからひを弄せんとす、嗚呼悲しからずや、しかも其はからひや人生に眞の幸福を持來すものならば、猶恕すべし、これ既に誤れる人生にしてはからひの何の利益なきことを知り了せるに非ずや、知りて猶且つはからひを弄す、無明の薰習何ぞ夫れ熾なるや、而も終に其はからひの無効なることを覺らしめ、世人と伍して其誤に陥らざらしめたまふ、これ如來慈父の御氣附に非ずや、我等如何にはからんとするも遂に吾人をして佛天の御はからひを仰がざる能

はざらしめたまふ、嗚呼如來の御惠無窮なる哉。嗚呼吾人人生慈父のはからひを信ず、何ぞ我等子等のはからひを挿むの要あらんや、如來の光は十方を照覽したまひ、三世を徹照したまふ、唯吾人は如來を信じたてまつりて、其親心を四海の兄弟に知らしむるの外人生亦何の仕事あらん。而して人生如何なる仕事も此親心を仰ぎて感謝の誠を捧ぐるの外なかるべし。言を換へて之を言は、一たび此親を認めて信仰に入りたる已上吾人一生の間南無阿彌陀佛の念佛と、其念佛を以てあらゆる職務を經營して粉骨摧身唯々佛恩を感謝すべき也。

北海道より(一)

拜啓、是よりいよ／＼北海道に渡ることに相成候。葛原君と面白く快談、此處迄至り申候。イヨ／＼此處にて相分れ申候、海上は、頗る平穩、油の如くに候。昨日一日花巻にてユツクリ遊び候爲、大に元氣盛に相成申候。兎んや今夜函館にて一泊致候に於てなや、明夜小樽着の豫定、オモシロク出立致候、御安心被下度候。

景色何んとなし、北極的に候。濱に岸なく、木なく、田畑直ちに波に接す。葛原君曰く、關西の白砂青松に比するに、暗き景色なり、ドスクラキ心地すと。予は寧ろ其凄涼たる一種の趣味を愛す。トニカク盛岡已北は初めての旅行なれば、面白く感じ候。しかしいかにも森と丘とのみに候。

青森ニテ
常 觀
八月十四日

他方信仰の淵源

(大日本佛教青年會講習會にて)

私の話は特に取調べて御話するので無いから、頗る亂雑になるかも知れませぬ。題は「他方信仰の淵源」と申します。之より三日間、此の題目に就きて、私の信仰の立場からお話する積りてあります。今大體の順序を擧げる時は、

- 一、佛教と念佛
- 二、念佛と信仰
- 三、信仰と人生

別に深い計畫がある譯では無いが、試みに秩序を立てると、斯うである。

先づ初めに「他方信仰の淵源」といふ題目であるが、此の題を一見すると色々な意味に取る事が出来る。或は佛陀を信じ念佛を稱へ、本願で安心する此の他方信仰は、佛教史上如何なる経路を取つて來たかといふ史的問題の意味にも取れる。又一方から見ると、大聖釋尊の信仰と如何なる歴史關係を以て居るかといふ問題にも取れる。併しながら此等の研究は私に於ては要點でないから、他の方々の御講話に譲りまして、

私は、吾が佛教の上で、最も力強く又最も簡潔なる他方信仰は、如何なる具合で顯はれたか。又此他方信仰を古來の聖賢が心中に頂かれた順序は何うであつたか。若し歴史的と言ふならば外界に顯はれた事實よりも、古來の聖賢の心の上で如何なる經驗を経て來たか、といふ事を私自身の信仰上からお話する積りてあります。

一 佛教と念佛

上

直に「佛教と念佛」に移ります。諸君は此の講習會で今日迄に種々の御講話を聴かれた事と思ひますが、定めて佛教なるものが如何にも廣く、殆んど摠え所が解からぬには、望洋の歎が有つたらうと思ひます。併しながら之は諸君ばかりでなく、佛教に志す者の常に感ずる處であつて、夫程に佛教の範圍は廣いのである。然るに其廣い佛教の上に、茲に念佛といふ一道があつて、南無阿彌陀佛を稱へ、一佛を信する一つで助かるといふ教がある。抑此の念佛の教なるものは、佛教全體の上に如何なる關係を持つて居るものであるか。之が第一の問題であります。

一體大聖釋尊の傳記は既に諸君が御承知の如く、自ら王位

を捨て家を出て、遂に樹下石上で成道し、一代法を説き給ひたものである。然るに其釋尊の教が段々後世に及んで茲に絶對他力念佛なる極めて簡單なる一の教を生ずるに至つて殆んど面目を異にしたかの觀があるのではないかと。之に於てか直ぐ歴史問題が起るのである。或は原始佛敎との關係が何うて有るか。或は佛敎本來の意味と如何なる關係があるかと。或は又廣く通佛敎の上に立つて理論的に研究して居る人の如きは、本來佛敎は一の佛を信じて行くといふよりも、寧ろ一の眞理を研究して行く教である。然るに一方に佛を信ずる他力主義の如きは、全く佛敎の精神と飛び離れたものゝ如くに考へて居る。又進んで佛敎は理論でなく、内心自覺の教であると言つて居る人でも、大聖釋尊の自覺せられた如く我々も自覺するてこそあれ、唯、一佛陀を信ずる他力宗の如きは、極端に言へば寧ろ基督教に類似するものである。など考へて居る人もある。今日の學者は多く皆な之である。斯の如き有様で、佛敎と念佛とが如何なる關係に在るかといふ問題は、まだ充分解けずにあるのであります。私も平生は純信仰の話のみ致して居りまして、斯の如き問題に就きて話する機會も少ないのであるから、今回は一つ之に就いて私の考

を聞いて頂き度いと思ひます。

さて斯の如き考から、私は初に「佛敎と念佛」「念佛と信仰」「信仰と人生」の三つに分けたのであるが、之はもと講話の便宜上から、其實此の三つは皆な關係して居るものである。即ち佛敎と念佛の關係を話せば、信仰は其中に含まれ、其信仰から人生は自然に出て來るのであります。

其處で初に「佛敎と念佛」であります。その前に私の話は全然信仰立場である事を充分御承知置きを願ひ度いのである。佛敎とは抑何んであるか、先づ初に佛敎の大體を決めてかゝらねばならぬのである。言ふ迄も無く佛敎は佛陀の教である。佛陀の教えられた如く行ひ、佛陀の到られた地位に到る事、之が佛敎本來の精神である。其處で其佛陀とは何であるかといふ問題になるが、佛陀とは所謂覺者の意味である。覺者とは今日の言葉で言へば自覺者である、何を自覺せられたかと言へば、此の人生を自覺せられたのであります。

夫であるから、佛陀は今日の人の言ふ如き大なる哲學者でも無ければ、大なる思想家でも無い。我々が日常實驗する此の人生の上に、直接自覺の光を持ち來した人である。而して其の佛陀の經驗せられた處を我々も經驗して其の佛陀の地位に到

るのが佛敎である。之はごく當り前の事でありませうか、今日の人が餘り遠く六かしく考へて居る故一言せねばならぬのである。さて佛陀は人生の自覺者であるが、其人生は何かといふに、人生は我々が眼前の事實である。我々が生れるより死ぬる迄他人に對し、又自分の上に、日夜歡樂苦痛の生活を續けて居る。此の生活自身が人生である。も一つ言ふと、死によりて人生が終るので無く、死後迄も人生を持つて行くのである。其の人生の上に自覺の光を見る教が佛敎で、之を見たが佛陀であります。

佛陀であります。佛陀とは、言ふ迄も無く大聖釋尊である。釋尊は御存じの如く十九歳の時に門を出て、眼に老病死を見、忽ち世の非常を悟られた。此の老病死の上に、更に生を加へて生老病死といふのである。之を簡單に言ふと、即ち生死である更に言へば、人生であります。我々は此人生の上に、或は病氣に犯され、或は死に悩まされ、或は他人に對して不平の心を抱き、或は自分の頼み難きに絶望して、色々生老病死の問題に苦んで居るのであるが、大聖釋尊は即ち此の人生の苦を解脱せられたのである。夫であるから、解脱する事が抑佛敎の初めである。言ひ換へれば佛敎は人生の苦を解脱せられたる佛

陀の教であるといふ事になるのである。

さて其の佛陀は如何にして解脱せられたのであるか。之は皆さんが釋尊傳を御覽下さると一番早いのであるが、今其中の最も要點を申せば、當時印度に於ては哲學的宗教が非常に盛んで有た。所謂婆羅門教である。處が釋尊は初めに之を聴かされたけれども、遂に解脱し得無かつたのである。即ち之を信仰的にいふと、人生の解脱は哲學的ではいかぬと言ふ事である。又當時の律法主義の教え、斯くせよ、斯くせねばならぬと教ふる律法主義の教によつても、解脱の道は開かれ無かつたのである。哲學的でもいかず、律法的でもいかなかつた釋尊は、最後に何んで安心せられたかといふに、即ち樹下石上、金剛寶座に、端座して、内心の苦み、即ち煩惱、今日て言へば煩悶の上に、終に解脱の光りを認められたのである。

チャートカ(本生譚)といふ最も古い釋尊傳に従へば、此時に於て、百千萬億無量の惡魔が現はれて或は大疾風を飛ばし、或は大雨を注ぎ、或は大火を降らし、或は熱砂を飛ばし、或は燃ゆる灰を降らし、或は利劍を注ぎ、或は火の泥土を降らし、佛陀を攻め奉つたとある。之は我々が内心の煩惱を表はしたもので、大疾風といふは、即ち我々の激し易き性質であ

る。大雨は我々の欲心である。大火は憤怒の思ひである。利劍は嫉みの心である。即ち我々の内心には、常に斯の如き悪魔が潜んで居るのであるが、大聖釋尊は彌々成道の前夜に於て彼等惡魔の激しき襲來を受け給ひたのである。處が此の時佛陀は如何なる有様で在らせられたかといふに、其の大疾風は有らゆる村落を壊しても佛の御衣の一片をだに動かす事が出来なかつた。其の大雨は凡ての森を沈めても佛の御衣の一端をだに潤す事が出来なかつた。其の大火は佛の傍に近附くや皆花輪と變じ、其の利劍は忽ち天華と變はつた。熱砂は忽ちにして花の吹雪と變はり、灰は見る間に旃檀紛末となり、泥土は直に香物と變じた。斯の如く何とも言ぬ美はしき譬を以て書かれてあります。さて之は何かと言ふと、一言に言へば惡魔と光明の戦である。而して之等の者が皆亡びた最後に於て惡魔は今度は大闇黒を以て佛陀を攻めて來た。而も佛陀は此の眞黒の闇に對して、慈悲と智慧の明かな心を以て向はれた。そうして此の闇黒が佛の光明に照されて全然取り去られた時、即ち十二月八日明星東天に輝く時を以て、佛陀は廓然として涅槃に入り給ひたのである。

さて以上は釋尊傳をごく簡単に申したのであるが、之に由

つて佛陀の意義は彌々明了になつたと思ひます。即ち佛陀とは、今言ふ如き道行さて斯の如き種々の煩悶苦惱を解脱し、最後に慈悲光明の塊として顯はれ給ひた人である。

猶ほ茲で簡単に原始佛敎に就いて一言しますと、佛陀が斯の如き道行さて自覺の境に達せられ、其の道行さと結果とを示された敎が原始佛敎であります。夫であるから原始佛敎は釋尊自覺の實驗を説かれた敎であると言つてもよいのである。彼の十二因縁の法門なるものは、即ち此の實驗の道筋に外ならぬのであります。十二因縁の事は今更詳しく言ふ迄も無いが、其の一番の初にある無明といふは、即ち一番最後に顯はれた闇黒である。又一番後にある老病死憂悲苦惱は釋尊が抑發心の動機となりし生死の大問題である。而して此の二つの間に十二の關係を附けて、人生の生老病死憂悲苦惱の根本は無明にある。其無明さへ無くなれば、即ち初めの生老病死苦惱は全く無くなつて、自覺の境に到る事が出来るのであると説くもの、是れ十二因縁の順觀逆觀である。全く釋尊の實驗其儘であります。今念の爲めに之を擧げて見ると、

無明 (Ignorance) 行 (Sankhara) 識 (Consciousness) 名色 (Name and Form) 六處 (Six provinces) 觸 (Contact) 受 (Sensation) 愛

(Thirst) 取 (Attachment) 有 (Existence) 生 (Birth) 老病死憂悲苦惱 (Old and death, grief, lamentation, suffering, dejection, and despair) の十二である。即ち初めの無明が原因で種々の惡を身口意に行ふ、之が行である。此の業行盡さずして、意識があり、これより形色と名目とを生み、次に六根六識を生ずるのである。之に感じて觸覺を起し、愛欲を生ずる、そして其の愛欲に執着して迷ひ初め、遂に生老病死憂悲苦惱永へに盡くる期無しと説くのであります。處が從來は此の十二因縁をば、佛敎の一の教理、而も極はめて哲學的に見て居つて、今私の言ふ如き實驗的の意味には誰も言は無かつたのである。けれども夫ては甚だ味はひが薄い。私は今茲で此の一々を悉く釋尊の實驗に當てはめる事は出来ぬが、大體に於て私の見方に、間違ひは無いと信じます。然しながら茲では、諸君が、佛陀釋尊は、生老病死の問題を最後に無明に突きつけ、夫を大なる光明を以て解脱せられたる自覺者なる事を御承知下されば可いのである。

さて其の釋尊の苦まれた人生は、即ち今日我々が苦む處の人生である。釋尊の得られた光明は即亦今日我々を照して解脱を得しめ給ふ處の光明であります。之に於て私が信仰に入

つた經驗を簡単に申しますと、私杯も此の最後の無明の闇晴れて、初めて信仰に入つた者である。初め佛敎を哲學的教理的に考へて居つた間は、自分には随分やつた積りであつても、遂に眞實の光明は來無つたのであるが、彌々人生の問題に躓いて、最後迄突きつけた時、——即ち夫は私が病氣に罹つて自分の立場を失なふと同時に、他人に對して非常な不愉快な心持を抱いて苦しんだのである。斯くなると人間は情け無い者で此方から人を憎めば人も自分を憎み、此方から人を隔てれば人も自分を隔てるのである。其の極私は右にも行けず左にも行けず、眞に闇黒の塊として自分を感したのである。恐らく此の時の心持では、此頃新聞にある如き悲惨なる事もやり兼ね無つたらうと思ふのである。併しながら之は私ばかりでなく凡ての人間は必ず最後には突當るのである。平生健康な者なら病氣の時に突き當る。自分が病氣になつて、人の健康な様子を見ると人が羨ましくなる。人生がたよりなくなる、斯くなる。平生は人を愛した者でも、嫉みの心も起れば、怒の心も出て來る。之は屹度何人にも出て來るのである。之れ抑人間が無明なる證據であります。

闇處で此の無明はいつ滅するかと言ふに、釋尊の經驗なされ

た如く、最後に大なる光明を見出した時、十二因縁の連鎖は皆な解けて、初めて生老病死の人生を解脱する事が出来るのである。今之を私の小なる経験で申す時は、斯の如く煩悶に煩悶を重ねて、私は最後に自分も人も親も兄弟も人生の物一として當てにならなくなつた。此の時に於て私の心は何うであつたかといふに、自分が隔て、向ふから隔てぬ友が欲しい、此方から憎みても、向ふから他迄親切を以て迎えて呉れる友が欲しい、若し斯の如き友人が一人有つたら、如何に闇黒なる自分も満足を得るで有らうと頻りに求めたのである。而して此の求むる心に向つて顯はれて下されたのが佛陀大悲の光であつた。即ち私は吾が求むる友人とは他人にあらず、佛陀の光明は昔より其友人として自分を哀れんで居て下されてある事に氣が就いて、初めて多年の暗黒が晴れたのであります。我々は釋尊の如く自分から光を見出す事は出来ぬが、大なる慈悲の光を以て常に我々に向て居て下さる佛陀がある。されば我々が佛陀在りと氣附く時は、既に佛陀は我々の前に來て下さるのである。之は他力信仰の上では甚だ大切な處で有つて、夜明けて日出するに非ず、日出て、夜明くるなり。而して一旦夜が明くれば、何人も日を疑ふ事は出来ぬのである。

我々は無明に閉されてる間は、解らぬが、最後に佛陀の恵みが顯はれて、自分の上に此の恵の御光を喜ぶ一念起る時は、もう佛陀を疑ひ度くても疑へぬのである。以上自分の小経験を以て、佛陀の境界を推し計つたのは誠に潜越至極で有るが佛陀とは眞に自覺したる光となつて人生に顯はれ給ひし覺者であり、又此の自覺といふ事が佛教の根本問題である事を申したのであります。(未完)

北海道より(二)

拜啓 大悲の御恵みに、漸次信仰心を惹起し來りて、毎夜二百已上の禮誦者あり、何れも熱心に人生問題につきて感動致し、正に其高潮に達し候事、喜入候。嘗に北海道は日本の米穀に有之候。人間の雑多なるに、加ふるに正に物質奮闘に全力を注ぎ、しかも到る處皆に富源を見出すを得るものに候へば、未だ捨身求法の志を起す迄は數年を経ざるべからず存候。然れども、早く人生問題に醒むるの人は喜びて來禮致候。特に深く感ずべきは、平生求道誌によりて同心の御同朋、當地は勿論、或は遠島より、或は十勝夕張より來訪したまふことなり。各宗別會の催にかゝる公開演説ありて、島地境野兩陣と共に話せり。又手宮の常應寺島君の寺にて、二回講話せり。本日は小樽婦人會を終り、是より佛教會館にて演説す。今夜最終の講話に聖徳太子親覺聖人の神聖なる家庭につきて講話可仕候。一週間の講話に多大の結縁を小樽に残して、明朝出立札幌に向ふ筈。齋藤たい機一日千秋にて待受の由に候。當地中々の元氣、先づ北海道の大坂なり。札幌は京都ノ如し、といふ。到る處大悲の恩寵感謝の至りに候。南無阿彌陀佛。
(廿二日皇太子の母、小樽見徳寺に於て) 常 觀

感謝

高松講習會

高松は信州に次て我は有縁の地なり。既に本年を以て三年夏期講習會に出席す。從來信州飯山地方は全國中最も有縁の地、昨年に至るまで五年間夏期傳道に赴けり、本年は請ふて夏期は之を他所に融通し、秋冷の候を以て之に赴くことせり。高松は實に之に次て最も宿縁深厚の地、前後八日間、前講には二門偈を講じて願力成就の五念門を説き、徹頭徹尾如來廻向の賜なるを仰く。後講には太子十七憲法を講じて絶対信仰の眞諦より流れ出づる人生活躍の世諦を説く。十七憲法は實に同地發起者の希望として提題する所にして、亦本年各地夏期傳道の中心題目たる也。此の如くにして一日は一日より信念を高めて、終に其高潮に達して其講を了る。和讃に曰く、

多生曠劫この世まで

あはれみかむれるこの身なり

一心歸命たえずして

奉讀ひ このむへし

聖徳皇のおあはれみに

護持養育たへすして
如來二種の廻向に
すゝめいれしめおはします。

鹽 飽 島

鹽飽島は法然聖人御流罪の舊跡なり。讃岐九龜の海上五十町に在り。島は七島より成る。其中、本島は聖人配所の月を眺めたまひしの所、一昨年来一たび之に詣てんと欲して未だ其縁熟せざりしが、本年便船を得て之を訪へり。黄昏九龜より出帆し、本島に着せしときは、夜正に初更、月、島嶺に傾きて、風物自ら凄涼、海濱燈影微かにして人家寂寥を極む。況んや濤聲砂を嘯み、孤舟岸に繫ぐに於てや。坐るに聖人流謫の當年を想はずんばあらず。多度津の丸尾氏、丸龜の鹽田氏兄弟同行す。海岸の家に宿り、翌朝早起勤行、源空讃を誦し、選擇集を拜讀す。來迎寺住職の案内を得て、聖人舊蹟の寺に詣づ。これ聖人が初めて着したまひし莊の預主駿河守高階時遠入道西仁の館なりけるといふ。聖人、海陸數十日の疲勞を慰めたてまつらんとて藥湯を作りて、奉りければ聖人浴したまひて

極樂もかくやあるらんあなうれし

はやまゐらばや、南無阿彌陀佛

近國遠郡の老若男女群集して世尊の如くに歸敬したてまつりて、一向專念なるべきやうを見たまひて、

阿彌陀佛といふよりほかは津の國の

なにはのこともあしかりぬべし

聖人當年の御辛勞と御化導とを回想したてまつりて感胸に充つ。

智惠光のちからより

本師源空あらはれて

淨土眞宗をひらきつゝ

選擇本願のべたまふ。

諸佛方便ときいたり

源空ひしりとしめしつゝ

無上の信心おしへてぞ

涅槃のかとをばひらきける。

草茫茫として靈蹟を没し、田園麥秀て空しく追慕の涙を澆く。唯石上書したまひし名號と西仁の持佛とを遺すのみ。嗚呼師聖人の此に在しとき、靈聖人彼の越後國府に在せり。かく師

弟兩聖人東西處を異にして御名を傳へたまひて、遂に今世相見えたまはざりし昔を懐へば斷腸にたへざるなり。歸帆丸龜に着して、權堀の正宗寺に詣す。是聖人が讚岐に上陸したまひし靈蹟也。聖人擢を以て海濱を堀りたまひしに清泉涌出す。乃ち詠じたまはく

南無の船、阿彌陀の擢てほる清水

末の世までも佛々と湧く

嗚呼選擇本願の清水は千古絶ゆることなし。行卷に曰く、猶し清泉の如し、智慧水を出して窮盡なきが故にと。南無阿彌陀佛。

明石、神戸、

明石有志の招によりて、朝顔光明寺に晝夜開會す。人生問題の説きて信仰の根柢に達す。來聽の青年、同行、共に大悲の慈光を仰ぐ。神戸福間邸を訪ひて故人を追懷し、親近相集りて法筵を開く。婦人會の開催により、城ヶ口説教場に自然法爾章を講ず。願力自然、念佛自然、無爲自然、皆如來回向の法雨沛然として衆生其恩澤に浴せずんばならず、嗚呼。

極樂寺講習會

講話

光明名號の因縁

(執持鈔講義) 前號に續く

(求道學會日曜講話)

近角常觀

第四章

一またのたまはく

光明名號の因縁といふことあり。彌陀如來四十八願の中に、第十二の願は、我かひかりきはなからんとかひたまへり。これすなはち念佛の衆生を攝取のためなり。かの願すて成就して、あましく無碍のひかりたして、十方微塵世界をてらしたまひて、衆生の煩惱惡業を長時にてらしましませり。さればこのひかりの縁にあふ衆生やうやく無明の昏闇うすくなりて、密善のたれきとす時、まさしく報土にむまるべき第十八の念佛往生の願因の名號をきくなり。しかれば名號を執持すること、さらに自力にあらず。ひとに光明にもよほさるゝによりてなり。これによりて、光明の縁にきざりて、名號の因をうといふなり。かるがゆへに宗師(善導大師の御ことなり)以光明名號、攝化十方、但使信心求念のたまへり。但使信心求念といふは、光明と名號と、父母のごとくに、子をろだてはぐむべしといへども、子となりていくべきたれなきには、ちゝはいとなくべきものなし。子のあるとき、ちゝがために、ちゝといひ、はゝといふ號あり。それがごとくに、光明をばいたとへ、名號をちゝにたとへて、光明のばゝ名號のちゝといふことと、報土にまさしくむまるべき信心のたれなくばあるべからず。しかれば信心をおこして、往生を求願するとき名號もなへられ、光明もこれを攝取するなり。されば名號につきて、信心をおこす行者なくば、彌陀如來攝取不捨の御ちかひ成すべからず。

河内國長野驛に在り。寺は融通念佛宗、杉崎大愚君の開催する所、同君は嘗て求道の爲に學舎に來られし人、本年を以て第一回を其地に開く。二日人生と信仰を説く。日恰も楠公湊川戰死の當日也。而して公の首丘のある觀心寺は其近傍に在り。乃ち之に詣し、謹て吊し奉る。寺は公が自ら督して建立したまひ、幼時之に修養し、其戰死の時一族を残したまひし所、而して後村上天皇檢校は其上に在り、吾人は公の精忠を追慕して感謝の念佛を捧ぐ。又聖德皇太子磯長廟、及び守屋追討の舊蹟は、上の太子下の太子と稱して亦其近傍に在り。吾人は宿縁の再び熟して之に詣づるの機會を興へたまひしを感泣せずんばならず。乃ち墓前に勝鬘經を拜誦し、又嘗て佛像を感得し奉りし勝地に靈石を拾ひて以て紀念となし、又下の太子に於て百濟の獻りし如意輪觀世音を拜して、皇太子の生々世々の洪恩を感謝し奉らずんばならず。歸路故郷に立寄りて母を省し、六月十六日朝歸京。第十七回大日本佛教青年講習會に出席す。

彌陀如來十攝取不捨の御ちかひなくばまた行者の往生淨土のわがひ、なに、
よりてか成ぜん。されば本願や名號、名號の本願、本願の行者、行者の本願
といふ。このいはれなり。本願寺の聖人の御釋「教行信證」にのたまはく、徳
號の慈父ましまさずば、能生の因かけなん。光明の悲母ましまさずば、所生
の縁うちきなん。光明名號の父母、これすなはち外縁とす。眞實信の業識、
これすなはち内因とす。内外因縁相合して、報土の眞身を得證すさみえた
り。これをたたとふるに、日輪、須彌の半にめぐりて他州をてらすとき、この
さかひ開冥たり。他州よりこの南州にちかづくとき、夜すてにあくるがごと
し。しかれば日輪のいづるによりて、夜はあくるものなり。世の人つれにお
もへらく、夜のあけて日輪いづと。今いふところは、しからざるなり。彌陀
佛日の照臨によりて、無明長夜のつみ、すてにばれて、安養往生の業因たる名
號の寶珠をば、うるなりとしるべし。

これは名高い章であります。先程より申すが如く、我々の
助かるのは佛の親の本願のお力によつて助かるのである。處
て今茲には、其の本願のお力をわけて、光明の縁、名號の因
此の因縁によつて、我々信心を頂く事が出来るのである。と
お示し下されたのであります。

此はもと「行巻」の中に光明の縁に催うされて、名號の因を
得、此の光明名號の因縁によつて、我々の心に信心の實を
得る。そうして今度は之が二重になつて、其の信心の實が因
となり、光明名號が縁となつて、往生極樂の眞身を證する事
が出来るのである。と二重の因縁が説かれてある。即ち本章
の末文の文が之である。此の意味を明かにして下されたもの
であります。

扱て之は一寸開くと理屈のやうであります。決してさう
では無い、我々が心中にお恵みを頂く實際の心持をお知らせ
下されたものである。先づ最初に宣はく、

た物に俄に出會つたやうに聞えるが、さうでは無い。佛の光
明は、我々が恵みに氣附いた時初めて御照し下されるのでなく、
實に昔より長時に我々の煩惱惡業をお照し下されてある。
さればこのひかりの縁にあふ衆生、やうやく無明の昏開う
すくなりて、宿善のたねささす時、まさしく報土に生まる
べき第十八の念佛往生の願因の名號をさくなり。

偕て斯の如き廣大なお照して以て、我々が久遠劫來の無明の
迷執もいつの間にか漸々に薄くなされてある。そうして彌々
最後に、如何にも廣大なる南無阿彌陀佛のお恵みであると氣
の附いた一念が、宿善開發して往生の願因たる名號の因の聞
えて下された時であります。其處で此の名號の聞えた時は、即
ち光明の表面に顯はれて下された時であるが、今いふ如くて、
如來の光明は此時初めて我々をお照し下されたのでは無い。
久遠劫來常に照しづめにして居て下されたればこそ、我々無
明の昏闇もいつしか薄くなつて、遂に名號の願因を聞くに至
つたのである。譬へば夜の明るくにして、太陽が彌々地平線
上に現れた時、世界は一度にしと明るくなるのであるが、併
し其前から太陽は刻々に我等に近づきつゝあつたのである。
之と同じく我々も宿善彌々純熟して、初めて如來のお慈悲
に氣が就いた時は、如何にも其御哀れみの廣大なるにびつく
りするのであるか、併し一旦氣が附いてから、之迄の事を振り
回つて見ると「あゝあれも廣大の御導であつた。之も如來の
お手廻はしてあつた」と、明かに今迄の道筋が皆な如來光明
のお導きであつた事が、解かつて來るのであります。偕て其
の御光に催うされて宿善が開發する。一も一つ言へば、此宿善

一、またのたまはく、光明名號の因縁といふことあり。
佛の廣大なお力を、光明の父の縁、名號の母の因と二つに別
けてお示し下されたのである。之は何も佛のお力に父と母と
の二つがあるといふ譯では無いか、我々に解かりのよいやう
に、譬を以てお示し下されたのである。

彌陀如來の四十八願の中に、第拾二の願は、我がひかりさ
はなからんとちかひたまへり。これすなはち念佛の衆生を
攝取のためなり。

大經の四拾八願中の第拾二の願は、即ち光明無量の願である。
我が光明百千億那由他の諸佛の國を照して、極まり無からし
めんといふ願であります。茲に極まり無しといふは、唯空間的
に十方無量の世界を照らすのみならず、照らして下さるばかりで無く、
如何なる惡人でも罪人でも、又如何なる貧者でも富者でも、
乃至地獄の苦を受けて居る者でも、又我々人間でも、又天上界
の快樂に耽つて居る者でも皆等しく心の底から照破して下さ
るのである。即ち現に我々が心中この光明のお照しを蒙つて
居る者であります。而して此の廣大無限の光明は何の爲かと
いふに十方世界の念佛の衆生を攝取して下さるが爲である。
かの願すてに成就して、あまねく無碍のひかりをもて、十
方微塵世界をてらしたまひて、衆生の煩惱惡業を長時にて
らしめます。

而して此の廣大なる光明無量の願は、もう疾くの昔に御成就
下されてあつて、今現に普く無碍の光を以て十方微塵の世界、
微塵の數程澤山ある十方の世界を、一々お照し下されてある
のであります。光明に出會ふ杯といふ時は、何か今迄無かつ

といふ事迄か、佛のお恵みに、外ならぬのであります。宿善を
我々人間の方へ附けて考へると解らなくなる。一體此の「執
持鈔」を撰して下された覺如上人は、殊に此の宿善といふ事
を喧ましくお示し下された方と見えて或時、唯善上人で有つ
たか、誰であつたか、覺如上人に對して、「貴方の仰せられる
のは、念佛往生ではなくて、宿善往生であるか」と尋ねられ
たといふ話さへあります。が此の宿善といふ事は、佛の御恵
みと離れたものでなく宿善は即ち宿世に受けて居た善根とい
ふ事で、即ち無始以來我々に附き添ひ給ふお恵の塊である。
而して多年のお照しの御恩で、遂に此の宿善が形に顯はれ、
名號の親心を聞くに至るのである。

しかれば名號執持すること、さらに自力にあらず。ひとへ
に光明にもよほさるゝによりてなり。これによりて、光明
の縁にさざられて、名號の因を得といふなり。
さて斯の如くてあれば、今度我々が名號を頂くに就きては、更
に自分の力は雜つて居らぬ、全く如來光明のお力ばかりであ
る。故に光明の縁にさざられて、名號の因をうといふのぢや、
といふ仰せてあります。

茲て此の名號を聞くといふは何うかといふに、餘り際立て
過ぎるかも知れぬが、私の頂いた實際を申し上げます。詳しい事
は小著「懺悔録」に譲つて、私は信仰に入る迄南無阿彌陀佛を
知らなかつたかといふに、否、生れてから長い間日夜に聽聞
もし、又自分にも餘程解かつた積りて居つたのである。けれ
ども何うしても、人生實際の上に當つて、之が力となつて現れ
て來ぬ。いつ迄も信仰は信仰、人生は人生と別々になつて、居

つて、どうも眞實の安心が出来なかつたのであります。一體此人生は信仰を離れて安心の出来る可き筈はないのである。處で私は斯の如き有様で、遂に人生に衝突して大に苦んだのである。そうして其極「もう何とも仕様が無い、誰か斯の如く苦める自分に向つて眞實同情して呉れる友は有るまいか。自分此方から向ふ事は出来ぬが、向ふから眞に隔てず自分を哀れんで呉れる友は有るまいか。唯一人でよいかから斯んな友が有つて欲しい。」といふのが私の煩悶最後の心持で有つたのである。處が彌々其の絶頂に達した時忽然として氣が附いて見ると、「自分は久しく此の友人を持ち乍ら、今迄其親切を知らなんだ者である。佛陀は實に其友人であつた。言ひ換ふれば、慈悲の凝り固まりが南無阿彌陀佛である」といふ事が始めて解つたのである。此の時の私の嬉しさといふものは、何とも言ふ事が出来なかつたのであります。今もいふ如く、私は此の前に南無阿彌陀佛といふ事は度々聞いて知つて居たのであるが、どうも此の時迄は眞實に安心は出来て居無かつたのである。人生の上の實際の力になつて居無かつたのである。處が此の時一念慈悲の塊が佛であると氣が附くなり、忽ち長の夜の明けた心地になつたのである。此の光明に照らされて「あ、佛こそ自分を捨てぬ親で有つたか」と氣の附いた一念が、即ち名號の聞えて下された時であります。

扱て已上は自分の實驗に引き當て、申したのであるが、信仰の味は、いつも光明に照らされて夜のあけた時、初めて如何にも廣大なる南無阿彌陀佛のお恵であつたと、往生の願因たる名號を頂くのであります。其處で次に

かるがゆへに宗師善導大師のは、光明名號を以て十方を攝化し、但、信心をして求念せしむとのたまへり。

即ち善導大師が、佛は光明名號の二つを以て十方衆生を攝化し、衆生をして信心を求めさせて下さると言はれたのは之であるといふ仰せてある。之は何うかといふに、設ひ光明が有つても若し名號が無かつたならば、言ひ替ふれば南無阿彌陀佛のお恵みが無かつたならば、も一つ言へば佛陀の親心の塊を頂か無ければ、我々信心を得る事は出来ぬのである。抑此の名號は何かといふに、佛が切なる大悲心から其の廣大なる親心を南無阿彌陀佛の六字に籠めさせられて、之を届けて衆生を助けんとお誓ひ下されたがもとである。即ち

設ひ我佛を得んに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我が名を稱せずば、正覺を取らじ

といふ第拾七願が之であります。法然聖人が一代の間南無阿彌陀佛をお喜びなされたも、此の第拾七願をお喜びなされたのである。親鸞聖人の『行卷』も此の拾七願をお教へ下されたに外ならぬのであります。其處で佛陀は先づ光明を以て衆生を照し、彌々機縁の熟した處で、名號を届けて信心を起さしめて下さる。次に

但、信心をして求念せしむといふは、光明と名號と、父母のごとくにて、子をぞだてはぐむべしといへども、子となりていくべきたねなきには、ち、は、となくべきものなし。子のあるとき、それがために、ち、といひ、は、といふ號あり。それがごとくに、光明をは、にたとへ、名號をち、にたとへて、光明のは、名號のち、といふことも、

報土にまさしくむまるべき信心のたねなくばあるべからず。しかれば信心をおこして往生を求願するとき、名號もとなへられ、光明もこれを攝取するなり。

此の一段は二重になつて來るのであります。夫は何うかといふに、上來申すが如くて、佛は光明名號の二つを以て信心を起さしめて下さるのであるが、今度は又此の信心を光明名號の二つで育て上げて下さるのである。今迄信心を催うさしめて下された光明は、我々が信心開發したらもう役済みになつて消失するかといふに、そうして無い。今度は此の光明の中に住む身になつたのである。即ち第一章の攝取不捨の利益に預かるのであります。佛のお恵みと、慈悲が解つてからの恵みと、解らぬ前のお恵みと、二色ある可き筈はないのである。けれども我々の方より言ふと、信心開發迄は信心を催うして下さる光明名號である。花の開く迄は、花を催うす春風春光である。開發してからは、信心を育て、下さる光明名號、花を育てる春風春光であります。今迄は何程名號を稱へても眞實の有難味は解からなかつたのであるが、一度念佛の廣大なるお恵みに氣附けられてからは、もう稱へずに置かうと思つても、稱へずには居られぬ。稱へれば稱へる程、彌々難有く御恩を喜ばせて貰ふ事が出来るのである。即ち光明名號は我々の信心を生みつけて下され、又育て上げて下さる父母であるとお譬へなされたのであります。若し此の父母が無かつたなら、如何しても我々に信心の種の出る筈は無いのである。然るに既に此父母が永劫の昔より我々に付き添うて居て下され、此の父母のお催うして茲に信心の種が結んだのである。そうして

今度は又此種か父母の恵みに育てられて遂に極樂に生れさせて貰ふといふ廣大なる結果を得るに至るのであります。處で茲で最も注意して聞かねばならぬのは、此の信心の種といふ點である。先程も申すが如く、斯の如き廣大なる如來の御親心が彌々我々の心中に届いて下された一念が信心であるが、若し此の信心の種を得無かつたならば、如何に光明名號の父母が哀れんで居て下されても、我々往生する事は出来ぬのであります。抑光明を母に譬へ、名號を父に譬ふるといふも、此の信心の種に就きて申す事である。子のあるとき、それがためにち、といひ、は、といふ號も、ある可きであるが、若し「子となりて出ていくべきたねなきには、ち、は、となくべき」名は入らぬのである。其の子供たるべき信心の有る時に於てこそ、始めて之に對して父と言ひ母といふ事も言はれるのであります。然れば南無阿彌陀佛の父といふも、光明の母といふも、正しく報土に生る可き此の信心の種に對しての父であり母である。さればこそ我々が「信心をおこして、往生を求願するとき」、自然に父の名號も口に浮んで下され、又「光明の母もこれを攝取」して下さるのである。そうして一代の間名號を稱へさせて貰ひ、一代の間光明の中に住はせて頂いて、此の世の縁盡くる時極樂淨土に往生させて頂くのであります。

されば名號につきて、信心をおこす行者なくば、彌陀如來攝取不捨のちかひ成すべからず、彌陀如來攝取不捨の御ちかひなくば、また行者の往生淨土のねがひ、なに、よりてか成せん。

其處て阿彌陀如來の攝取不捨の御誓ひは、もとく、信心の行者を攝取して下さらんが爲である。然るに如何に昔より光明のお哀れみは有つても、廣大なる名號に對して信心を起す行者が無いならば、佛の攝取不捨の御誓ひは空になつて仕舞ふのであります。處が又信心を起す行者は有つても、佛に攝取不捨の御誓が無かつたならば、行者は如何しても往生淨土の願を達する事は業來はないのである。

されば本願や名號、名號や本願、本願や行者、行者や本願といふ、このいはれなり。

茲は佛凡一體、信行一致の謂はれを言つて下されたものであります。即ち佛の本願、十方衆生を助けねばおかぬとある本願の親心のお力は、南無阿彌陀佛の念佛に現はれるのであります。法然聖人が一代御唱導下されたも此の本願の念佛である。既に「選擇本願念佛」と言つて下されるのである。されば本願即名號、名號即本願、本願や名號、名號や本願であります。又、此の本願の親心は、彌々行者の心中に届いて行者の信心開發する時刻をまつて、其の目的を達して下されるのである。行者は又この本願の親心に氣が就いて信心決定するのである。かるが故に本願や行者、行者や本願である。親や子、子や親、親心即親、親即親心であります。次に

本願寺の聖人の御釋『教行信證』にのたまはく、德號の慈父ましますば、能生の因かけなん。光明の慈母ましますば、所生の縁そむきなん。光明名號の父母、これすなはち外縁とす。眞實信の業識、これすなはち内因とす。内外因縁和合して、報土の眞身を得證すとみえたり。

のであります。

これをたとふるに、日輪、須彌の半にめぐりて他州をてらすとき、このさかひ闇冥たり。他州よりこの南州にちかづくとき、夜すてにあくるがごとし。しかれば日輪のいづるによりて、夜はあくるものなり。世の人つねにあもへらく。夜のあけて日輪いづと。今いふところは、しからざるなり。彌陀佛日の照觸によりて、無明長夜のやみ、すてにははれて、安養往生の業因たる名號の寶珠をば、うるなりとしるべし。

之は度々言ふ事でありすが、『口傳鈔』の中に之に就きての聖人の直々のお話が出て居るのであります。曰く

無碍の光曜によりて無明の闇夜はるゝ事。本願寺の聖人親鸞、あるとき門弟にしめしてのたまはく。つねにひとのしるところ、夜あけて日輪はいづや、日輪いで、夜あくや、兩篇ななたちいかんしると云云。うちまかせてひとみなおもへらく、夜あけてのち日いづとこたへまふす。上人のたまはく、しからざるなり、日いで、まさには夜あくものなり。

親鸞聖人は時々門弟に對して、斯の如き手ひどき御教化が有つたものと見えます。『救異鈔』の第十三章に、唯圓坊に對せられて、「唯圓坊お前は予が言ふ事をば信んずるか」「そんなら言ふが、お前は予の言に従つて人を千人殺せるか」など、あるのも、随分思ひ切つた御言葉である。併し斯く手ひどく言つて頂かなければ、我々しづととき人間は氣が就かぬから、殊更に際どく氣附けて下されたものと思ひます。

之は即ち初めに申した親鸞聖人『行卷』の御文を御引用なされたのであります。上來申した處で、最早や盡きて居るのであります。ざつと今一度申せば、我々が信心を頂く源は佛の名號である。若し名號の慈父が無かつたなら、我々の心中に信心の花は永久に開かぬのである。又此の名號のお恵みが我々に届くのは、光明の悲母が長時に照して居て下されるからである。若しこの光明の悲母が無かつたなら、我々は永久に往生淨土の見込は無ないのである。猶ほ茲には略してありますけれど『行卷』の本文には

能所因縁和合す可しと雖も、信心の業識にあらずば、光明土に到る事無し。

といふ一句が有ります。之は何うかといふと、譬へ斯の如く光明名號の父母が揃つて下されても、肝心の信心が確かて無ければ、極樂土に行く事は出来ぬと言つて下されたのである。一體に親鸞聖人は茲の一段には餘程力を入れ給ひたるものと見えて、御稿本を拜見すると、茲の處に此の通りに朱が入れてあります。今私が茲に持つて居るのは其御稿本の儘であります。偕て上來度々繰り反しましたが如く、光明の母の縁、名號の父の因で、信心の業識を頂く。そうして今度は其の信心の業識が因となり、光明名號の父母が縁となつて、極樂に生れさせて行く。所謂二重の因縁になつて來るのであります。此の故に「光明名號の父母」を外縁と言ひ、眞實信の業識これを内因と名け、この内外の因縁和合して報土に生れるのであると仰せられたのである。次は光明の催うしによつて、名號が届いて下される有様を譬喩を以てお示し下された

……そのゆへは日輪まさに須彌の半腹を行度するとき、

他州のひかりちかづくについて、この南州あきらかになれば、日いで、夜はあくといふなり。これはたとへなり、無碍光の日輪照觸せざるときは、永々昏闇の無明の夜あけず。しかるにいま宿善ときいたりて、不斷難思の日輪、貪瞋の半復に行度するとき、無明やうやくやみはれて、信心たちまちにあきらかなり。しかりといへども貪瞋の雲霧かりにおほふによりて、炎王清淨等の日光あらはれず。これによりて煩惱障眼雖不能見とも稱し、已能雖破無明闇ともものたまへり。日輪の他力いたらざるほどは、われと無明を破ずといふことあるべからず。無明を破せずばまた出離その期あるべからず。他力をもて無明を破するがゆへに、日いで、のち夜あくといふなり。これさきの光明名號の義にこそ、ろをなじといへども、自力他力を分別せられんために、法譬を合しておほせことありきと云云。

全く同意味の御文であります。日輪が他州を照す時此の南州は夜である。けれども、其日輪が段々近づいて來て、其光り南州に及んだ時は、夜が明けるのである。夫であるから、夜あけて日出づるにあらず、日出て、夜が明けるのである。其の如く佛の光りに照らさるればこそ、我々無明長夜の闇も晴れて、あゝ有り難いと佛のお慈悲を仰ぐに至るのであります。一體今日信仰問題に悩んで居る多くの人は、此の點に於て大なる考へ間違ひを仕て居る人が多いのである。今日道を求むる人の多くは何う考へて居るかといふに、誰でも早く信仰を得度い、早く闇を出度い、と焦つてばかり居つて、根本の

佛陀の法輪を仰ぐ事を知らぬのである。之では何時迄經つても安心の出来る善は無。然らず、根本の佛陀大悲の法輪にさへ眼を附ければ、闇は自然に去るのであります。斯くいふと又或人は、夫であるから早く恵みに照らされねばならぬといふ。之も間違ひである。佛の光明は、此方から照されねばならぬので無く、彼方より昔から常に照しつづめ、恵みづめにして居て下さるのである。然るに我々の方が勿體なくも其の如き廣大なる御恵みに氣が附かず、勝手に迷ふて居るのであります。抑々親の恵みとは、如何なるものであるか。法然聖人の歌に

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ。

又聖人の『和讃』には宣はく。

盡十方の無碍光は、無明のやみををらしつゝ、

一念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらしむ。

又『御一代記開書』で拜見すると、蓮如上人は此の歌と和讃とを引寄せて御法歎あつたと申す事でありませぬ。斯くの如く、佛陀の親は盡十方無碍の光明を以て、昔より我々が氣の附く時節を待つて、下さるのである。夫であるから我々は自分の心持の如何や、罪の有る無しを詮索は差置きて、早く此の廣大の御恵みを仰かせて貰ふ事が肝要である。此の御恵みさへ眼に入れば、無明の闇は自然に消える。夜はひとりてに明けぬ事は無いが、日輪出づれば忽ち消えるのである。言ひ換ふれば日の出た事が夜の明けたる事である。御慈悲に氣附いた時が、やがて闇の破れた時であります。然るに今日信仰の問題に惱

不思議力をたもてば、往生の業まさしくさだまるゆへなり。もし彌陀の名願力を稱念するとも、往生を不定ならば、正定業とはなづくべからず。我すてに本願の名號を稱念す。往生の業すてに成辦することなるべし。かるがゆへに臨終に、ふたゝび名號となへずとも、往生をとぐべきこと勿論なり。一切衆生のありさま、過去の業因まらゝなり。また死の縁無量なり。やまひにをかされて死するもあり。つるきにあたりて死するものもあり。水におぼれて死するものもあり。火に燒て死するものもあり。乃至殺死するものもあり。酒狂して死するたぐひもあり。これみな先世の業因なり。さらしにのがるべきにあらず。かくのごときの死期にいたりて、一旦の妄念をおこさんほかば、いかてか凡夫のなりひ、名號稱念の正念もおこり、往生淨土の願心もあらんや。平生のとき期するところの約束もしたがい、往生のぞみむなしかるべし。しかれば平生の一念によりて、往生の得否は、さだまれるものなり。平生の時、不定のおもひに任せば、かなふべからず。平生の時、善知識のことばのしたに歸命の一念を發得せば、そのときをたもて、娑婆のなほり臨終とおもふべし。そも、南無は歸命、歸命のこゝろは、往生のためなれば、またこれ發願なり。このこゝろあまれく萬行萬善をして、淨土の業因となせば、また廻向の義なり。この能歸の心、所歸の佛智に相應するとき、かの佛の因位の萬行、果地の萬徳、ことごとく名號のなかに攝在して、十方衆生の往生の行體となれば、阿彌陀佛即是其行と釋したまへり。また殺主罪をつくるとき、地獄の定業をむすぶも、臨終にかされてつくらざれども、平生の業にひかれて、地獄にかならずおつべし。念佛もまたかくのごとし。本願を信じ、名號となふれば、その時分にあたりて、かならず往生は、さだまれるなりとしるべし。

大分長くなりましたから、成る丈け簡單に申します。此の一章は特に法のお力を手強く示し下された丈けひと際有り難い章であります。根機つたなしとして、卑下すべからず、佛に下根をすくふ大悲あり。行業をろそかなりとして、うたがうべからず。經に乃至一念の文あり。佛語に虛妄なし。本願にあやまりあ

んで居る人の中には、或は南無阿彌陀佛と念佛する事によりて夜が明けぬのかと思つたり、又此方では何ともしたら、忽然夜の中から日輪が出て來さうに考へて居る。之等の人は寧ろ餘りきまり過ぎ、力味すぎるから、却て得難いのであります。佛の御恵みに氣附せて頂くのに、苦しんだり力味たりせねばならぬ必要は毫も無いのである。唯早く氣を轉じて御恵みを仰がせて貰へばよいのであります。若し此方から何うかした事によりて現はれる如き光ならば、夫は眞の法輪の光でなく、電氣燈の光りある。瓦斯の光である。瓦斯や電燈の光では夜は明けぬ。唯佛陀日輪の照觸によりてのみ我々無明昏闇の夜は明けぬのであります。

偕て斯のく覺如上人の書かれた物は、一體にごく明瞭であります。『歎異鈔』等に有るやうな有難き感も夫程でも無いやうであるが、夫丈け道筋ははつきりして居るやうに思はれる。これは覺如上人は親鸞聖人より第三代目で、『歎異鈔』は第二代目如信上人の時の作物である。もとより信仰に薄い厚いがあるべき善は有りませぬが、聖人を隔れば隔たる程、筋道の方が明るくはつきりして來たものと思ひます。『歎異鈔』殊に『未燈鈔』『御消息集』等の御聖教は、寧ろ此の道筋の解かり難い處に、難有味が有るのであります。

第五章

一私にいづく。
根機つたなしとして、卑下すべからず。佛に下根をすくふ大悲あり。行業をろそかなりとして、うたがうべからず。經に乃至一念の文あり。佛語に虛妄なし。本願にあやまりあやまりらんや。名號を正定業となづくることは、佛の

らんや。

此の一段は古來名高い御文で、能く皆んなが言ふ所でありませぬ。我々は根機が拙いからとて、如來の本願に對し卑下してはならぬ。我が如き根機の拙い事では、信心も頂かれぬて有らう、我が如き罪の深い者には、如來の恵みも及ばぬて有らうなど、自分で自分をへり下し、自分で自分を隔て、かかるとは、自から好んで親の親切を受けぬものである。も一つ言へば親のお力を疑つてかゝつて居る者である。抑。佛の大悲は、斯の如き下根の衆生が目當てぢやと言つて、下さるては無い。又往生の行業たる念佛が稱へられぬからとて、如來の御救ひに疑ひの心を起してならぬ。夫だから御經の中には乃至一念と言つて、下さるては無い。乃至とは一多包容の言なり」といふ御言葉も有つて、一生にたつた一度の念佛でも善いと呼んで、下さるのである。抑。佛言に虛妄なしとて、佛陀の仰せに虚言の有らう善は無い。去れば既に經文の上にも明に斯くある上は、此の本願に過りの有らう善は無いのである。

名號を正定業となづくることは、佛の不思議力をたもてば、往生の業まさしくさだまるゆへなり。もし彌陀の名願力を稱念すとも、往生を不定ならば、正定業とはなづくべからず。我すてに本願の名號を稱念す。往生の業すてに成辦することをよろこぶべし。

既に名號を正定業と申して居るのである。斯くいふ所以のもの、即ち此の佛智不思議の名號を保てば、往生に間違ひないから、之を正定業と申すのでは無い。若し此の彌陀本願

の名號を稱へても、猶ほ往生が不定だといふならば、之を正定業と名ける等は無いのである。猶ほ此の名號を正定業と名ける事は、何處から來たかと申しまするに、善導大師の『觀經の疏』に

一心に専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥時節の久近を問はず、念々に捨てざるものは是を正定の業と名く、彼の佛の願に順するが故に。

といふ御文がある。即ち法然上人が此の一句を見て他力本願に氣附かれたといふ有名の方である。之から來たのであります。其處で我々は既に此の正定業たる本願の名號を持ち、念じさせて頂いて居るのである。(此書の執持といふ名は此の名號を念する意味から來たのであります。然れば我々は既に往生の業を成就させて頂いだ者である。されば此の仕合はせを深く喜ばなくてはならぬ事である。

かるが故に臨終に、ふたゝび名號を稱へずとも、往生をとぐべきこと勿論なり。

さて斯く往生の業たる本願名號を滞りなく心中に頂いた上は、我々の往生はもう此時に決定せられたものである。設ひ臨終の時一聲の念佛をも稱へる事が出来無かつたにしても、極樂に往生すべき事は勿論であります。尚ほ序に申しますが、私は茲迄の御文が西山の善慧上人の『鎮懺用心』の文に、實に能く似てると思ふのである。『鎮懺用心』の文を拜讀して見ますと、

睡つて一夜を明せども、報佛酬因の擧に即ち明し、覺て一日を暮せども、弘願内證の裏に即ち暮す。

ぎにあたりて死するものもあり。水におほれて死するものもあり。火に焼けて死するものもあり。乃至寢死するものもあり。酒狂して死するたぐひあり。これみな先世の業因なり。さらにのがるべきにあらず。

一切衆生の過去の業因は其人々々に從つて種々無量であれば、從つて死の縁も種々である。誰れが如何なる事て死ぬるやも解らぬのである。或は今春來度々申した福間氏のやうな難病を受け死ぬかも知れぬ、又日露戰爭で戦死した人達の如く、どんな意外な事が出来して、劔や鐵砲に中りて死ぬかも知れぬ。或は又松島艦と共に沈没した中村候補生や長谷部候補生の如く、若いからとて何時水に溺れて死ぬるかも知れぬのである。又火事に會つて焼死する者もあれば、寢死にする者もある。之等は皆現在我々の眼前に見る處の事實であつて、誰がいつ如何なる事て死ぬるかも知れぬのである。是れ皆な其人々々の先世より定まれる業因の致す處であれば、何人と雖も更らに免れる事は出来ぬのであります。茲は例の『歎異鈔』に唯圓坊が、人を千人殺せとあつても殺せぬと、同じ味ひである。

斯のごときの死期にいたりて、一旦の妄念をおこさんば、いかでか凡夫のならひ、名號稱念の正念もおこり、往生淨土の願心もあらんや。平生のとき期するところの約束もしたがい、往生ののぞみひなしかるべし。

斯の如く死の縁は其人々々に從つて種々様々であるか、彌々之等の死期に臨んだ時は、我々凡夫の當然として、何人と雖も一旦の妄念は必ず起るに決まて居る。否妄念の外に、稱名

根力頑しとて却慮を生ずること莫れ、佛に下根を攝する誓既に成れり。行業乏しとて狐疑を致すこと莫れ、十念を經とするの文是れ驗なり。

急に勵も喜し、正行増進の故に。懈り倦も快し、正因圓滿の故に。

徒に機の善惡を論する勿れ、正覺の強縁を忘れされ。益々自の堪不を闕て、偏に深重の大悲を仰く可し。

といふのである。實に有り難き御文であります。我々は一念佛の慈悲に氣が就て見れば睡つて一夜を明かしても、報佛酬因の床の上に眠らせて頂いて居るのである。目醒めて一日を暮しても、彌陀弘願の光明の中に暮らさせて頂いて居るのである。根機が鈍いとして心配する事は要らぬ、佛陀は此の根機鈍き我々の爲に廣大の本願を起して下されたのである。念佛か稱へられぬとて、彼是れ懸念するには當らぬ。經の中に十聲一聲でも善いと誓つて、下さるのである。急に稱へても有り難ければ、懈り倦みても、矢張り本願に叶ふて下さるのである。徒らに我が心の善惡を憂て、佛陀本願の力強き事を忘れてはならぬ。自分が極樂に往生するに堪えるか堪えぬかなどの心配は全然忘れて、唯深重の御哀れみを喜ばして貰ふばかりである、と實に何とも言へぬ有り難き御文であります。併しなから茲は若し聞き損ふと、所謂法に落ちて、大變な邪見になる所だから、能く注意して頂かねばならぬのである。次に一切衆生のありさま、過去の業因まらゝなり。また死の縁無量なり。やまひにをかされて死するものもあり。つる

念佛の正念や往生淨土の願心といふやうな貴い心が起る筈は無いのである。さて斯の如き我々てあつて見れば、逆も臨終の一念を頼みにする譯にはゆかぬ。されば平生の時に惠みを頂いて安心する此の約束が確かでないければ、我々凡夫は往生の見込無いものである。爾るに平生の時に決定する阿彌陀佛本願の御約束、此程確實なる往生の約束は無いのである。

しかれば平生の一念によりて、往生の得否は、さだまれるものなり。平生の時、不定のおもひに任せば、かなふべからず。平生の時、善知識のことばのしたに、歸命の一念を發得せば、そのときをもて、娑婆のおほり臨終とおもふべし。

されば我々凡夫往生の得否は、臨終の如何に關係なく、平生に決定する信仰の如何によりて定まるのである。若し平生の時に、往生の信念が不定不確實で有ならば、極樂に生るゝ事は出来ぬのである。これは法然聖人が、往生一定と思へば一定、不定と思へば不定であると仰せられたのと同意味であります。夫であるから、平生の時善知識の御言葉の下に歸命の一念をおこしたら此時既に我々の往生は定まるものである。此時を以て娑婆の終り、臨終と心得よと言はれたのであります。一體茲から以下は言南無者のお釋になつて居るのである。親鸞聖人は此の歸命を如何に仰せ下されたかといふに、「歸命といふは本願招喚の勅命なり」とあつて、佛の方より衆生を呼んで下さる呼聲だと示された。即ち此の佛の御呼聲に促されて、我々が佛に歸する一念を起すのである。我々が歸命の一念を發得するといふのも、佛の此の御呼聲がかかるからであ

ります。而して此の一念、佛に歸する思ひの起つた時は、もう此の時既に此の世の終り、臨終である。此の後は身は人生にありながらも、光明中に生活させて頂くのであります。

そも、南無は歸命、歸命のこゝろは、往生のためなれば、またこれ發願なり。このこゝろ、あまねく萬行萬善をして、淨土の業因となせば、また廻向の義なり。

抑南無の言葉は歸命の意味である。歸命の意は今も申すが如く、佛が必ず救ふとある廣大のお恵みを、有り難いと頂いた一念であれば、是れ即ち往生を願ふ意である。是れ即て又發願の心である。全體此の發願といふ言葉も親鸞聖人より言ふと、佛の方に言ふべき語であります。茲ては其佛陀が衆生に對して發願して下された廣大の親心を承はつて、此方より佛に向ふ心に御用ひなされたのであります。而して此の南無と頂く歸命の一念に、佛の廣大なるお恵みによつて、我々の稱ふる念佛は無論の事、する事、爲す事、萬行萬善皆な往生淨土の行と轉じ替はる。之は此の方から力めてするのでなく、唯廣大なるお恵みと喜んで居れば佛の廣大なるお力、いつの間にかそうして下さるのである。されば又廻向の義も具はるのである。一體此の廻向といふ事も本來は佛より衆生に對して、廣大の恵みを差し向けて下さる時に用うる言葉であるが、覺如上人は茲にも又其佛の御廻向を頂いて、此方より一念南無と歸する意味に御使ひなされたのである。凡て覺如上人の御教化は、佛が我々を哀れんで下さる方よりも、其の御哀れみが衆生の心に響いて、衆生が之を頂く心持の方が強いのであります。親鸞聖人は之を何う言はれてあるかといふ

之は『歎異鈔』第十四章の

攝取不捨の願をたのみたてまつらば、いかなる不思議ありて罪業をおかし、念佛まうさずしてをはるとも、すみやかに往生をとぐべし。また念佛のまうされんもたゞいまさとりをひらかんする期のちかつくにしがひて、いよ／＼彌陀をたのみ、御恩を報じたてまつるにてこそまふらはめ。つみを滅せんとおもはんは、自力のこゝろにして、臨終正念といのる人の本意なれば、他力の信心なきにてまふらふなり。

といふ御教化と同じであります。即ち我々の往生は臨終に念佛を稱へる、稱へぬに係はらぬ。若し運よくして稱へる事が出来れば、夫は彌々淨土往生の近附いたに就けて、益々御恩の廣大なる事を喜ばして貰ふ念佛であります。反す／＼も我々は臨終の如何に心を止めて無い。阿彌陀如來の本願はそんな不自由なものてなく、無碍絶對の御法である。臨終の時善からうが、悪るからうが、又娑婆に在る中に何んな事が出来やうが、平生業成の教である。平生の時眞實佛の恵みを喜ばして貰つた者ならば、何事が有らうと、必ず淨土に攝取して下さるのであります。

今日は思はず長い講話になりました。覺如上人の御教化は斯の如く、極めて道筋を明らかに示し下さるのであります。之を以て今夏最終の講話と致します。

に「發願廻向」と言ふは、如來已に發願して、衆生の行を廻施し給ふの心なり」と言つて置いて下さるのである。

この能歸の心、所歸の佛智に相應するとき、かの佛の因位の萬行、果地の萬徳、こと／＼名號のなかに攝在して十方衆生の往生の行體となれば、阿彌陀佛即是其行と釋したまへり。

さて此の如來の發願廻向の御親心が、衆生の心に反響して、あゝ有り難いと頂く時は、即ち衆生の能歸の心が、所歸の佛智に相應した時である。此の時、佛の萬行萬徳は、佛の方に在るばかりでなく、南無阿彌陀佛の念佛の中に籠つて十方衆生の心内に入り、衆生が往生の行體となつて下さる。即ち我々が南無阿彌陀佛と稱へる念佛の中には、佛の大善大功德が宿つて下さるのである。即ち阿彌陀佛即是其行である。之れ迄は善導大師の「言南無者」の釋の味はひを教えて下されたものであります。次に、

また殺生罪をつくるとき、地獄の定業をむすぶも、臨終にかさねてつくらざれども、平生の業にひかれて、地獄にかならずおつべし。念佛もまたかくのごとし。本願を信じ、名號をとらふれば、その時分にあたりて、かならず往生は、さだまれるなりとするべし。

又平生の時に一度殺生罪を犯した者は、設ひ臨終の時に再び之を犯さないても、平生業に牽かれて必ず地獄に落ちる。念佛も又其の如く、平生に本願を信じ念佛を喜んで居れば、もう此時既に往生決定である。臨終の時に念佛が唱へられやうが、稱へられまいが、更に夫等には係はらぬ事である。尙

告白

智眼闇しと悲む勿れ

小笹 熊谷

私は謗法闡提の大罪人です。十惡五逆の大惡人です。佛は遂に此大罪惡の者を引入して下さつた。實に勿體ない、實に御方便が有がたい。

私は幼少の時六人の義弟妹が夭折したので非常な寂しさを感じ、父母の身上を思うては人生の矛盾を考へ、子供心にも苦んだ事が有りました。今から願みると皆佛様のやるせない御催促で有つたのに、誹謗して居たのはまことに勿體ない次第でした。それから二十歳まで偽を以て包んで居た私の心は、遂にその本性を現して淺ましくも監獄にまで墮落しました。けれども父母の事はかりは忘るゝ事が出来ませんでした。私を學問させる爲六十に近い老體をも厭はず遠國に行かれた父上の苦勞はどの位で有つたらうか、また衣食を節してまで働いて下さつた母上の心配はどの位で有つたらうか。これと思うと苦しくてたまらない、親不孝な私が思うてさへ悲しいのに、父母ほどの位苦み悶へて居られるであらうかと思ひ續けては、父母の悲しまれる姿が目の前にちらつくやうでした。夜などは枕にかじり付いて泣いたのは幾度あるかしれません。こんな苦みを感じつゝなほ世間の事に心を奪はれて居た私は

急に道を求めやうともしませんでした。けれども幼少の時から何だか寂しいやうな、物足らぬやうな心があつたが、此時一層強くなつて来た。それが爲何か此心を満足させるやうな書籍を読みたくてたまらなかつた。此時宗教の書籍も読みました。少しも分りませんでした。通佛教の評義や人に理解させるやうに書いた佛書のみで、痒い所に手の廻らないやうな感がある。釋尊はこんな理屈で安心せられたらうが、自分には駄目である。自分は自分自ら考へて人生を解釋せねばならぬと思つて居ました。『悟よ、いづれ薄命の、遂にうくべき徒名か。』といふ晚翠の詩の句が此頃唯一の慰みてした。

此後私は同因と争をしたが、其夜寝る時非常なる良心の呵責に逢ふて苦みました。いかに對手の人が氣毒でたまらず、なぜ争つたらうかと身を悔んで泣きました。けれども意志の弱い身の淺ましきには又一ヶ月もすると忘れて前過を再びするのです。そこて是非早く悟を開いて過ちのない身とならねばならぬと決心して、修養に心がけ始めました。藤村操の自殺したのを聞いて同情に堪へず、此不可解を解決してくれる智者は無いのかしらんと恨めしく思ひました。しかし私は釋尊が六年修行して遂に悟を開かれた如く、私共も修行さへすれば必ず解決が出来ると思つて居ました。しかし何の修養も出来ませんでした。

其年の秋の彼岸の中日に教誨師の教誨を聴いた時、言ふ勿れ老來初めて道を學ぶと、古墳多くは之れ少年のといふ白樂天の詩句と、

害がある、拂へば蜘蛛が可愛想である、能く考ふればこんな害は此外にも澤山ある、人類に害を加ふる動物は皆さうである、考ふれば考ふるほど迷ふのである。之も人間の淺い智恵では分らない、なるべく人並にやつて居やうと決心して、其後は肉食も止めませんでした。

此少し前に卜翁の我宗教を讀んで、非戦論にます／＼心を動かされた。けれども段々自分の足らないのを氣付くにつけ自分の考と實行と撞着して居るのを知つた。自分は人と交るに常に怒り、常に怨んで争論ばかりして居るのではないか、心に非戦論を思ひつゝ、身は常に戦争ばかりして居るのではないか、と氣付いてから如何にしても他力の宗教に深い意味がありそうに思はれました。此頃母のことについて願が叶はなかつた爲、非常な苦みをしました。此苦悶の結果色々考へた末、自分が生れたのが罪で、死は猶更の罪であるやうに感じました。此時信仰の餘瀝と歎異鈔を讀みましたが、近角先生の苦みなつたのと、自分の苦む問題とは異つて居るやうに適切に感じられなかつた。又歎異鈔に順次生とか、來世とか書いてあるのがドウモ信ぜられない。私は現世に於て理想を實現させやうとして苦んで居ました。此年の暮、清澤先生の精神講話を讀みました。最後の二章、『天職聖職』、及『倫理以上の安慰』は實に適切に感じました。親に孝養の出来るのも佛の御力、親に孝養の出来ないのも佛が爲させ給はぬのである、との教訓は實に有がたく、折々は此二章を涙と共に喜んで讀んだ事もありました。又此頃一方では忘念が盛んに起つて、抑える事の出来なくて、涙をしぼつて清淨にならうと苦んだ事もありま

曉の寢覺にせめて願みん、日々に三たびは願みずとも、といふ歌が非常に身にこたへ、それから修養を忍せにしてはならぬと感じ、精神修養の書籍を読み始めました。けれども實際の修養は中々出来ません。をれて其翌春これを打あけて教誨師の教を乞ひました。其時私は戦争罪惡論や、人生の運命といふ事について御伺しました。同師は非常に同情をよせて、懇ろに御話下され、卜翁の我宗教及我懺悔を御勧め下さつた。其後佐々木師の實験の宗教を讀んで、佛教にもこんな味のある書があつたかと、繰返々讀みました。終に引いてある『煩惱に眼さへられて』の和讃を讀んだ時は思はず涙が浮びました。佛を信ずるといふのも此感の大きいのだらう、之は必ず佛が御座るに違ひないと思つて佛道修行しやうと決心しました。

其頃、フト私が小供の時殺生した事を思ひ出し、如何にも恐ろしい罪であるといふ事が感じられ、佛教に殺生罪を戒めてあるのは有がたい、がなせ人々は實行しないのかしらん、魚鳥獸は人間の用をなすべく生れて居るから、殺すのは當然だといふなら、鬼よりも恐ろしいではないか、否々、人は殺すもかまはない、今の所では自分だけ殺生は勿論、肉食も止めねばならぬと決心した。それから副食物でも肉だけは食はずに居ました。人は皆な私を氣違だと笑つたけれども、私は食へませんでした。丁度其時監房の掃除をして蜘蛛の巣を拂ひかけたが、フト思ひついたのは、これは蜘蛛の家である、拂ふまいと思つたが、清潔上拂はずにはおけないので思ひきつて拂つた。その後で私はつく／＼考へた、拂はなければ衛生に

した。此精神講話を讀みましてからは人世問題の事はあまり念頭に浮ばなく、佛の本願といふことについて考へ初めました。一切衆生を救はずば正覺を取らじと御誓になつた法藏比丘は、已に成佛して御座るのに、私共衆生が救はれて居ないのは道理に合はぬではないかと、冷やかな理屈を以て佛を計らふとしたのは實に勿體ない次第でした。或日如何しても本願といふ事が分らなくつて苦みました。こんな疑が有つてはとて救はれる事が出来ないが、如何しやうと苦しくてたまらなかつた時、教誨の終に佛は疑の有るまゝ救うて下さると聞いて有がたく感じ、喜んで晝食をした事があるが、後になるとやはり疑が出てくる、けれども精神講話を讀んでからは人生のことについては少しも考へないやうになりました。或日近角先生でも講話に御出下さるればよいと思つて居ましたが、一週間と立たないのに先生が御出下さると聞いて非常に喜び、佛が私に安心を與へて下さる爲のやうに思はれました。其後數日立つて、私は同因と争をして苦んで居た時先生は御面會下さつた。その時私は何といふ淺ましい事でした。實に恥づかしい次第です。其時先生は此方から喜ばねばならぬと力んではいけない、何もかも皆佛の御計らいにまかせねばならぬ、此扉を内から向ふへいくら押ししても開かない、此扉を明くるには手前に引かねばならぬ、あまり此方から押しつめましつたから喜ばないのだ、無明長夜の灯炬なり、智眼暗らしと悲むな、生死大海の船筏なり、罪障重しと嘆かざれ、慈光遙かにかぶらしめ、光のいたる所には、法喜を得とぞの

べたまふ、大安慰を歸命せよの御和讃、及御本書略文類の文を高らかに稱へ、手を取るやうにして御話下さりました。けれども私はぼんやりしたやうでドウモ喜が出来ませんでした。其後信仰問題を見ましたが、自分は邊地懈慢疑城胎宮に陥つて居るやうで、如何したら此邊地懈慢疑城胎宮を逃れる事が出来るかと考へましたが、或曰「信心の人にまじらして、疑心自力の行者も、如來大悲の恩を知り、稱名念佛はげむべし」の和讃をみて、自分は疑心自力であると自覺が出来ればよいのであると考へました。此時佛の本願を思ひ出し、此本願があるから自分で心配するには及ばぬと思ひて居ましたが、或曰のこと午後近角先生の講話後、信仰問題を聞いて讀んで居ましたが、

一たび苦悶の暗を破り來りたるときは、忽ち世界は光明界である。人生の極限を悟りして絶対の靈界に手が達したるときは、人生の邊畔を沒了するのである。戸を排して蒼穹を望む、即ち室内は天空と連るのである。首を回らせは今の小人生は豈圖らむや、永久の靈活の生命と連續して、悠久なる生活を吾人日常の行動の上に將來するのである。此に於てや。我向ふ所佛之れを助け、我據り立つべきもの、獨り佛陀の大威神の他に何物もなき様になる。此に至りて苦悶は宿夢の如きものである。

といふ所を讀んだ時、何とも云はれぬ感に打たれ、今迄塞がつて居た胸が急に開けました直ちに、「無明長夜の灯炬なり」の和讃を稱へましたが、佛の聲としか聞えなかつた。「智眼くらじと悲むな」罪障重しと嘆かざれ」と稱へるのは自分の口

んな淺ましい心が起つたり、行が顯はれたりするやうでは、何にもならない、やはりト翁のやうに嚴肅にキリストの五誠を守らうかと思ひ立つた事もありました。又或時は全く佛を疑つて自分から逃げやうかと思つたこともありましたが、けれども佛は私を放したまはなかつた。斯んな時は佛の方から佛を思ひ付かせて喜ばせて下さりました。この頃不圖した夢によつて、初めは命ぜられたまふ、余儀なくして居た仕事、佛の御計ひで深い因縁あつての事であつたと氣付き、これから一生喜んで此仕事を爲すべしと決心しました。其翌日與へられたる職業は如何なるものも神聖であるとの教誨師の教誨がありました。私は不思議に感じます。佛の御計ひを感じました。その頃私は或事から同囚の人を恨んで居ましたが、或夜半にフト目を覺ますと、自分の恨んで居る人が隣に寝入つて居る。その寝顔が實に無邪氣である。私は斯く枕をならべて寝るのは深い因縁あつての事だらうと思ひ、心地觀經の有情輪廻して六道に生る、猶し車輪の如く始終なし、或は父母となり男女と爲り、世々生々互に恩あり、父母を見るが如等しく差無し、聖智を證らされば識るに由なし、

一切男子は皆是父、一切女人は皆是母、如何ぞ未だ前世の恩を報せざるに、却て異念を生じて怨疾を成す。

といふ語を稱へ、實に勿體ない申譯が無い、と懺悔の涙に咽びつゝ、三部經の五惡段と、歎異鈔の第二章とを讀んで、實に自分は罪惡の有情であるといふ事をしみしみ感じまし

て稱へるが、一々佛が私を呼びかけて下さるやうに感じ、幾度も繰返して稱へましたが、其有難さが全身にしみ渡つてたゞ泣くばかり、今迄の案じや苦みはずつかり取り去られて身がすが／＼しました。其翌日教誨師に御面會致して、此事を申し上げました。所が師はそれは結構です、實は近角師から御傳言があつた、お前は此方にて急に求めるから、丁度昇の際に顔を押しつけて呼吸の出来なくなつて居るやうだ、一歩退けば新鮮な空氣が吸へるが、今の所では餘裕が無いから喜べない、氣の毒だが致方が無い、との御話でした。私はそれを聞いて最後の致方が無いといふのを案じました。私は近角先生や教誨師の御力で信を得させて下さることが出来ると思つて居ましたのです。然るに今致方ないの語を聞いて考へました。其時フト思ひ出したのは佛の本願、佛の本願は一切衆生を救はないうちには、如何なる苦毒の中に身を置くとも忍んで悔いがないとの仰せてある、よし善智識には致方ないと見限られても、佛は必ず救ふて下さる、此佛の本願にまかするより外はない、と思ひつゝ、聖教を拜讀しました。此時未だ燈鈔攝取不捨事、信心の定まることは釋迦彌陀の御はからひとみえて候へば、住生の心に疑なくなり候は攝取せられまらせたる故とみえて候。攝取の上はともかくも行者のはからひあるべからず候」といふ所を讀んで非常に有がたく喜びました。それから今迄無味乾燥に感じて居た聖教の文字が實に有がたく私の身に最切に感じられました。ことに分らなかつた自然法爾章の文字が一言一句有がたく感じられました。

其後煩惱が激しく起つた時などは、佛を信じて居る身でこ

た。

又或日の事、綿入長衣の取替があつた時、自分のは今迄のより短いのが來たので、又、他人を恨み出して、不平不満でたまらなかつた。こんな事位に苦むやうでは佛を信じて居る甲斐がない、如何したら此不平不満の苦を取り去る事が出来るかと、自力であせろうとしたがいけない。そこでト翁の我懺悔の譯者の序文を讀んだ「たとひ全世界を得るとも靈魂を救ふ能はずんば何かせむ」といふのをみて、あゝ實に自分が悪かつた、自分は精神を救ふ事が出来たのである、僅か一枚の着物は、どうでもよい、こんな事位に苦むのは實に淺ましい、自分にこんな汚れた心が有るから、佛はこんな機會を與へて自分の悪い事を知らせて下さつたのであると、不平不満の苦は轉じて、有がたい勿體ないの喜となつた。もう恨んだ人は皆恩人であると感じられた。

此頃監房で食席を掃除する時、他人の分まで働いて心ひそかに得意で居た。所が掃除の爲やうが足りないといふ注意を受けた。けれども誰も掃除をしやうとする者が無い、そこで自分はこれだけ人の爲に骨折つたのに人は禮どころか皆知らぬ顔をして居ると、非常に不足に思つて、今までの満足は何處へか行つて苦を感じた。監房へ歸つてつく／＼考へるに、更に自分が悪い、自分で少しばかり善い事をして、人の爲にしたらと思つて居るのは如何にも慢心して居るのである、かねて聞いて居る七寶の牢獄とは此事であらう、如何したら此牢獄の信界の監獄を讀まうとて、手に取るや否や非常に懺悔の感

に打たれ、自分ではモトしやうがない、たゞよき人の計にまかすより外はないと云ふのが、實に有がたく身に適切に感じた。

此年の暮、八年も音信しなかつた實の親に、一は自分が少年の時佛を誘つた事を懺悔し、一は今度の入信を喜んでもらひたいと思つて端書を出しました。すると忘れもしないが十二月三十日、妹から両親は國に御出にならず、妾は奉公してゐます、實に残念です、どうか兄さんも早く立派になつて下さいとの返事が来た。これを見て私はたゞ泣いたのです。妹を奉公させ、両親は國に御出にならぬとは如何なる不幸にあられたのであらうかと、續々としていろ／＼な事を思ひ出し、早く両親と妹とを満足させねばならぬが、今では自分の身すらも自由でない、ドウしやうと一時に心配になつて、佛恩を喜ぶ事も打忘れて、只將來の理想を畫かいては慰めやうとしたが、よしすべて自分の理想通りに實現する事が出来て、両親や妹に満足と與へたにしたら所が、遂には別れねばならぬてはないかと、一念心の奥に浮ぶなりこれも駄目であつた。其時大經の下巻を見たが、自分の心中の現在の苦惱が殘らず書いてある。獨生獨死獨去獨來とか、愛欲榮華常に保つべからず皆當さに別離すべし、といふ御語がいかにも苦しいのである。けれども自分はこゝの所が讀みたいので、繰返し／＼讀んだが悲しくてたまらない。正月だからと思つて我慢してみるのが、夕方になるとほろ／＼と涙がこぼれる。丁度正月の二日、たまらないと思つて貸與された雑誌を讀み、如來の作願を尋ねれば、苦惱の有情を捨てずして、廻向を主としたまひて、

ます／＼知られました。其後近角先生に御面會いたし、種々委しく承り、疑懼の念は去りました。

その翌年の四月また／＼非常に激烈なる煩悩に襲はれた。自分の心を欺いて墮落しようと思つてかけた。けれども佛は引とめて下さつた。一日煩悶懊惱の極、苦しい涙をしぼりながら、

生死の苦海ほとりなし、久しく沈める我等をば、彌陀弘誓の船のみぞ、のせて必ず渡しける。
南無阿彌陀佛を稱ふれば、此世の利益さはもなし、流轉輪廻の罪消えて、定業中天のぞこりぬ。
難思の弘誓は難度の海を度するの大船、无碍の光耀は無明の闇を破するの惠日なり。

等の和讃や、聖教を仕事しながら口で稱へた時、何とも云へない有がたい感に打たれ、「生死の苦海ほとりなし」のせて必ず渡しける」の句が身にしみ渡つた。限りなき人生の苦惱の極と、此上なき人生の歡喜とを一時に感じた。殆ど一ヶ月ばかりは慈光に酔ふたやうで、佛の御恩の有がたさと、之を知らぬ人の氣の毒さとして、涙ながらに念佛を稱へて居ました。

今迄自分は信仰があるから人を感化せねばならぬと思つて居たが、却つてあべこべに自分が人に感化され(善化)つゝあるといふ事が感じられ、勿體なさにならず、縁のある人に本願を話した。これからは御聖教以外の書籍は見る氣にならず、見ても面倒で讀んで居られない、學問も知識もいらぬ、人生は只佛の慈悲のみである、私共は此佛の本願を人に知らずる事が第一の仕事であると感じられ、之が爲には如何なる不

大悲心をは成就せり」の和讃をみてあゝ有がたい、佛は自分のやうな苦惱の有情を捨て、下さらぬのであつたと、喜びつゝ御本書の總序を讀みましたが、全文残らず身にしみ渡つて有がたく、今迄はたゞ思ひきつた事を書いてあるとのみ思つて居た此御文は、自分のやうな逆惡な者を恵み下さる御聖意であつた、と初めて分り慚愧にたえなかつた。其翌日近角先生の觀世音菩薩の贊を掲げて、新年の講話が有つたが、贊の句が一々身に適切に感じられ、殊に戒雷妙雲樹法雨と、終の爲父母爲勝友、彼生西方彌陀家との句が實に有がたく、何も彼も皆佛の御導であつたといふ事がしみ／＼感じられました。これから「大聖各もろともに、凡愚底下の罪人を、逆惡もさらぬ誓願に、方便引入せしめけり」の御和讃は自分の事であつたといふ事が始めて分りました。

それから半年ばかり立つてまた迷ひかけた。自分は如何しても人のやうに喜ばれないやうである、邊地とか憊慢とか云ふ文字を見ると、何となしに氣にかゝりて、今迄の信仰が偽てはなかつたかしらんとまで思はるゝのです。そこで早速教誨師に御伺いたした所、師はそれは佛に對するヒガミで有ると仰せられた。私は其夜眠醒めて考ふるに、平等大悲の佛に對してヒガミをもつなどは實に勿體ない、自分は聖教を日夜讀いて居ながら、こんな迷が起るとは何といふ事かと思ひながら、總序の「行にまよひ信にまどひ心くらく識少く惡重く障多きものこと如來の發遣を仰ぎ」といふのを稱へ、非常な靈感に打れ、それから信卷三心釋の信樂の御釋を讀んで、自分の身の淺ましいのがしみし感じられ、佛恩の深重な事が

利益を受けても、如何なる不幸に陥つても、如何なる苦痛を受けても厭はないと、非常な勇氣が出て來た。けれども人は中々自分の云ふ事を聞かない、よし聞いても自分の思ふやうに熱心に求めない、否、人は熱心でも我慢我執の強い自分の性格は、他人の向上心を滅殺して居るのである。自分は大恩ある佛を疵つけて居るのである。自分はよくよく惡業重き者であると感じ、近角先生の講話の時「そくばくの業を持ちける身にありけるを助けんとおぼしたちける本願の忝けなさを」の聖人の御述懐を、今更のやうに有がたく感じた。

此年は種々な人生の上から、現世利益和讃を直接身に引あて、有がたく感じ、此和讃によつて苦を轉じて喜ばして頂いた事は幾度もあつた。それから人生は生死の苦海である、此苦海に沈淪して居る自分には、佛より外に頼みになり力になるものはない、といふ事が身にしみてこたへるやうになつた。求道第參卷第一號、「佛陀は吾人の生命也」の一文は、一字一句残らず有がたく感じて居る。昨年以來此感謝の文と、清澤先生の他力の救濟とを讀んで、感涙にむせんだ事幾度あつたかしかない。

(私は今夜も友人の病床で此感謝の文を讀んで感泣した)
無始流轉の苦を捨て、无上涅槃を期すること、
如來二種の廻向の、恩徳まことに謝しがたし。
あゝ實に私は蛇蝎よりもひどい、極惡最下の惡人である。すべての人から指彈されて居る罪人である。然るに此惡人を殊に憐み給ふ御恩の前には頭は上らぬ。
多聞淨戒えらばれず、破戒罪業嫌はれず、

たゞよく念ずる者のみぞ、瓦礫も金と變じける、
 の和讃を稱へて非常の歡喜と勇氣とを得た事は幾度もある。
 又法然聖人が耳四郎にむかひて、『宿縁もとも有がたし』とて
 罪惡重障の凡夫の出離、ことに彌陀難思の願力によらずんば
 かなひがたかるべし、とて手を取りて懇ろにとききかせ給ふ
 と仰せられた所を讀んで、感に打たれた事は幾度もある。佛
 は耳四郎や、私のやうな極惡の凡愚を、善巧方便して遂に願
 海に引入れて下さるのが實に有がたい。私は此御恩を思ふと
 自分の身分を忘れてしまふのです。

私は成功しやうと思つて居たのが、失敗したのですから、
 初は失望落膽後悔の念のみでした。然るに一たび佛の願に氣
 付いてから、何事も御恩であつたと云ふことか知れた。私の
 やうな我慢我執の強い者は、とても一通りては佛の本願に氣
 付かないから、佛はわざ／＼監獄にまで引入れて、トウ／＼
 本願を知らして下さつたのです。一たび大悲大願の親心を聞
 いたのですもの、モウ成功も何も望まない、自分で學問しに
 東京に來たと思つて居たのは智慧の眼が足りないのて、實は
 佛の本願を聞く爲に來たのでした。私の知らぬ間に日夜苦勞
 して、護持養育して下さる御恩の有がたさ、こんな慈悲の親
 様に出逢ふた身の幸福は外にたとへやうはありません。私は
 實に光榮に感じます。南無阿彌陀佛。

歎異鈔

近角常觀

第九章 (第五號に續く)

念佛まうしさふらへども踊躍歡喜のこゝろをろそかにさふ
 らふこと、またいそぎ淨土へまいりたさこゝろのさふらは
 ぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんと、
 まうしいれてさふらひしかば親戀もこの不審ありつるに唯
 圓坊おなじこゝろにてありけり

唯圓坊が聖人より直々御教化を蒙らるゝ有様が眼前にあり
 くと見へるやうである、『歎異鈔』の特徴たる人生直接の御
 教化は此章の如き最も著しくあらはれてある、私はつく／＼
 思ふには若し『歎異鈔』なかりせば、たとひ廣略『文類』は
 ありとも之を人生直接に頂くことは出来なかつたであらう、
 『歎異鈔』の各章上來述べ来る如く、必ず『文類』に於て其源を
 發見することが出来る、されど文類だけを見ては此『歎異鈔』
 にあらはるゝ如く人生の上になされた信念として頂くことが出
 來ぬ、かく云へばとて固より『歎異鈔』の筆者が『廣文類』に合
 はせようといふやうな意思はなかつたであらうが、聖人の御
 教化が『廣文類』其儘なるがゆへに自然に相合するは固より當
 然のことである、之を以て見ても文類は毫も法門の考を以て

見てはならぬ、『歎異鈔』同様の意味が漢文で書きてあるもの
 と覺悟をせねばならぬ、此唯圓坊の尋に對しての御述懐は恰
 も『信卷』末の悲嘆の御文と同意である、曰く、

誠知悲哉愚禿沈沒於愛欲廣海、迷惑於名利大山、不
 喜入定聚之數、不快近眞證之證、可耻可傷矣。

此文と『歎異鈔』と符節を合するが如くである、念佛まうし
 さふらへども踊躍歡喜のこゝろをろそかにさふらふとは恰も
 定聚の數に入ることを喜ばずと同意、いそぎ淨土へまゐりた
 さこゝろのさふらはぬとは眞證の證に近くことを快まずと同
 意である是れ唯圓坊が自督上の不審を御尋したるに對して聖
 人直ちに御自督を以て御諭しなされたることなれば、文類の
 文句との對比などは恐くは御兩人念頭にはなかつたのであろ
 うなれど、内心の御自督其物が同一物なればかくもかつさ
 と相合するのであらう、夫について『文類』の文も單に彼御自
 釋の一文だけで拜してはならぬ、前後を一貫して拜すれば『歎
 異鈔』と益々同意たることを發見する、上の眞の佛弟子や念
 佛者は無碍の一道の下に述べたる通り、『信卷』末には信心を
 得、念佛する者を稱して經文を引きて、聞法能不忘、見
 敬得大慶、則我善親友、乃至若念佛者、當知此人、是人
 人中、分陀利華といひ、善導の心歡喜得忍の釋を引きて阿彌
 陀佛國清淨、光明忽現、眼前何勝、踊躍といひ又念佛者の釋
 を引きて今生既蒙此益、捨命即入諸佛之家、即淨土是也と
 いひ、遂には、眞知彌勒大士窮等覺、金剛心故、龍華三
 會之曉、當極無上覺位、念佛衆生、窮橫超、金剛心故、
 臨終一念之夕、超證大般涅槃、故曰便同也、加之獲金剛

心者、則與韋提等即可獲得喜悟信之忍、是則往相廻向之
 眞心徹到故、籍不可思議之本誓故也とまで極言された
 是、眞の佛弟子たる所以である、聖道の諸機、淨土の定散機は假
 の佛弟子、六十二見九十五種の外道は偽の佛弟子、獨り横超他
 力の金剛信の念佛行者こそ眞の佛弟子なりと宣ひたそて聖人
 忽ち自己身上に回想し來りて嗚呼我れ此の如き定聚に入り、
 眞證の證に近づきながら何事ぞと痛切峻峭なる懺悔をなした
 まひて、悲哉愚禿、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑
 し歡喜得忍の情疎かにして、臨終一念の夕の近くことを快ま
 ず耻づべし、傷むべし矣と御述懐したまひた、我等垢穢不淨
 愛溺慾海の愚夫、我慢我情偽善僞詐虛名虛飾内懷虛假の卑劣
 漢は何等の面目を以て佛祖の眞見に見へ奉るべき、唯圓坊が
 心配して聖人に尋ねて下さつたも尤もである、而して是正に
 我等の御尋したい點である、而して親戀も此不審ありつるに
 唯圓坊同じこゝろにてありけりとは亦如何に偉大なる御教化ぞ
 や。私も此御教化の偉大なることに初めは氣附かなんだ、
 或時一人の求道者來りて曰く、我如來を疑はざるも喜ぶ心起
 らずといふて大に熱心に求め來られしゆへ、私は頻りに自己
 の經驗を述べて如來大悲の喜ばざるべからざることを語つ
 た、されど如何にしても其人が喜ばしと言はず、そこで翌
 日の再會を期して別れた、翌日時間にいたりて急ぎて他より
 歸宅せしとき其人ははや待ち受けて居る、忽ち前日の如く喜
 ぶべきを述ぶるも益々己が心を追求して苦むもの、如し、其
 容貌の唯ならざるを見て、心づき前夜安眠せしや否やを尋ね
 しに、否と答へぬ、そこでフト我身をふりかへりみるに前夜

安眠せしのみならず今朝来さこそ佛恩を喜びたることもなかつた、而して此人の顔を見るや、忽ち過去の記憶を呼び起して歡喜を述ぶるも、此人に大悲の達せざるは當然の事である。一念慚愧の思に住するや、何とも言ふべからざる孤獨寂寥の感に打たれた、其瞬間に念頭に浮び來りたる御言は「親鸞も此不審ありつるに唯圓坊同じ心にてありけり」といふ聲であつた、孤獨の身に聖人が忽ち床を同ふして同情を注がる、様に感じた、そこで即刻其實際と實感とを披露して、「我も決して御身の申さるゝやうに常に喜びつゝあるのではないされど喜ばぬものを益々憐みたまふ大悲なり」と此聖人の御教化を取次ぎた處大に安心して歸られたことがある、其時始めて「唯圓坊同じ心にてありけり」の偉大にして一點私なきことが分かつた。

偕かく聖人同情の聲は其喜ばれぬもの救ひたまふ大悲大願の顯現である、故に信卷悲嘆の次に本願は難治の機を救済したまふが本意であると口を開きて『涅槃經』の阿闍世王の煩悶入信の實験を引きたまひた、是常に私が熟讀拜見し奉り『懺悔錄』『信仰問題』を初として本鈔講義にも屢々述ぶる所である私は實に此阿闍世王と同様な内心の經驗にて信仰に入つた、そこで聖人が此の如き適切なる文字を二十三枚半も長々引用したまひしも恐くは無意味ではなからう、即ち御悲嘆の御文より推するに御自身御速懐の引續と拜見する、此の如き大煩惱の阿闍世王が此の如來の大慈大悲の父母にたすけられし事實を示して遂に此の如き大德音を宣布したまひた、曰く「是ヲ以テ今據ニ大聖眞說ニ難化ニ三機難治ニ三病者憑ニ大悲弘

ろこぶこゝろなり、樂はたのしむこゝろなり、これは正定聚のくらゐをうるかたちをあらはずなり。とある即ち踊躍歡喜のこゝろをさかにさふらふと尋ねられしゆへ、いかにも天に踊り地に躍りて喜ぶべき筈であると仰せられた、聖人は慶喜と歡喜とを文字の使ひ分けをしたまひた、慶喜は信を得て後に喜ぶの意、歡喜は未來淨土を欣び喜ぶの意とせらる、即ち恰も定聚の位に入りたるを喜ぶは慶喜、眞證の證の近くを快むを歡喜といふてよろしい、偕此の如く成就の文には聞其名號、信心歡喜といひ、流通の文は其有得聞彼佛名號歡喜踊躍乃至一念とあるにも拘らず、よろこぶべきことをよろこばぬにて往生はいよゝ一定とおもひたまふべきなりとは随分思ひ切りた御教化である、抑々『信卷』下卷は就の文を本として行者の信樂開發の有様を示したまひたのである、そこで言「歡喜」者形ニ身心悅豫ニ之貌也とある、其身心悅豫は我等が喜ばんと企てゝ喜びたるものでない、世の道を求むる人が先づ自分で喜びたいと企てるが大ある誤である、信を得ねばならぬ、稱へねばならぬといふて企てるが自力であると同様である、自力で喜ばんとするも、何の效もなく、又喜も來らぬ、『御一代聞書』に曰く、

信を得ずして、よろこび候はんと思ふこと、たとへば糸にて物をぬふに、そのまゝにてぬへばぬけ候やうに悦候はんとおも、信をぬはいたづらことなり、よろこべたすけたはんと仰られ候ことにもなく候、たのむ衆生をたすけたまはんとの本願にて候、
とても我等が如何に喜ばんとするも信なくば喜ばれぬ、現に

誓ヲ歸ニ利他信海ニ於哀ヲ斯ヲ治ス、憐ニ憫ニ斯ヲ療シテ、應ニ如ニ醍醐妙藥ニ療ニ一切病ヲ、濁世ノ庶類、穢惡ノ群生、應ニ求ニ念金剛不壞眞心ヲ、可ニ執ニ持本願醍醐妙藥ヲ也、應ニ知、是實に「佛かねてしるしめて煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば他力の悲願はかくのごとき、我等がためなりけり」と仰せられた點である、いそぎまゐりたさこゝろのなきものをことにあはれみたまふなり」の大德音である、かく信卷悲歎連懷の文のみならず、其前後に涉りて殆んど信卷下卷全部にあらはれたる御自督が此章に遺憾なく我等に告白して下されたのである、私は此の如き聖人直々の御教化を度々親しく聞かれたる如信上人、唯圓房の光榮を羨み、亦翻て六百五十年の末、一端なりとも此鈔によりて之を拜聽するの恩徳を感謝し奉る、

よく／＼案じみれば天におどり地におどるほどによろこぶべきことをよろこばぬにて、いよゝ／＼往生は一定とおもひたまふべきなりよろこぶべきこゝろをさへてよろこばせざるは煩惱の所爲なり、しかるに佛かねてしるしめて、煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば他力の悲願はかくのごとき、われらかためなりけりとしられて、いよゝ／＼たのもしくおほゆるなり、
『一念多念證文』に『大經』流通の歡喜踊躍乃至一念を釋したまひて、歡喜はうべきことをえてむずとさきだちて、かねてよろこぶこゝろなり、踊は天におどるといふ、躍は地におどるといふ、よろこぶこゝろのきはまりなきかたちなり、慶樂するありさまをあらはずなり、慶はうべきことをえてのちによ

成就の文に信心歡喜とあるでないか、然らば其信心歡喜は如何にして來るが、聞其名號とあれば、本願を聞くより來るのである、其本願には信樂とあるではないか、信樂といふは我等が起す淨信愛樂ではない、そこで『信卷』本に曰く、
然從ニ無始ニ已來、一切群生海流ニ轉無明海、沈ニ迷諸有輪、繫ニ縛ニ衆苦輪、無ニ清淨、信樂、法爾無ニ眞實、信樂、是以無上、功德難ニ值遇、最勝淨信難ニ獲得、一切凡小一切時、中、貪愛心、常能汗善心、瞋憎之心、常能燒法賊、急作急修、如ニ炙ニ頭燃、衆ニ雜毒雜修之善、亦名ニ虛假諂偽之行、不ニ名ニ眞實業也、以此虛假雜毒之善、欲ニ生ニ無量光明土、此必不可也、何ヲ以テ、故ニ、正由、如來行ニ菩薩行時、三業所修、乃至一念一刹那、疑蓋無上、雜、斯心者、即如來、大悲心、故、必成、報土、正定之因、如來悲、憐苦惱、群生海、以、無碍廣大、淨信、廻、施諸有海、是名、利他信眞、信心、
實に是れ此章全體の大音宣布の根源である、よろこぶべきこゝろをさへてよろこばせざるは煩惱の所爲なり、無明海諸有輪、衆苦輪とは畢竟煩惱である、此煩惱のために法爾として清淨眞實の信樂を生せぬのである、實によろこぶべき心をさへてよろこばせぬのである、故に念佛を申しながら無上の功德も得られず、信がないからしりぬけてある、畢竟貪愛瞋憎の心盛にして如何に喜ばんとするも何の爲にもならぬ、急作急修して頭燃を拂ふが如くするも畢竟糸を結ばずして縫ふが如くである、『信卷』末の悲歎の文も此信樂釋と同意である、しかるに最後に然らば信樂といふは此の如き我等に向て如來

か一念一刹那も疑を離へたまはず、如來か我等に對する大悲心即ち是れが信樂である、畢竟此の如き我等苦惱の群生を悲憐したまふ本願其物である、是即ち佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」との自誓を生ずるのである、是即ち我等か内心に開發し來る信樂である、そこを「としられていよいよたのもしくおほゆるなり」と仰せられた、即ち是れ信心歡喜、若くは歡喜愛樂といふ所以である、かくの如く此鈔は「信卷」の根本と全く同意ある、されど此鈔は實際にかけて、直接に頂ける様に、しかも其如來の思召を如何にもよく分かる様にしめて下された「よろこぶべきことをよろこばぬにて往生はいよいよ一定」よろこぶべきことをおさへてよろこばせざるは煩惱の所爲、佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられた「など痒を搔く位ではない、いかにも惱みの底、苦しみの急所を押へての御教化である、私かに伺ふに此煩惱あれど大悲にてたすかるとの德音は源信和尚の煩惱障「眼難」不見、大悲無倦常照、我と同様の御教化である、我等は飽迄も煩惱の塊である、其煩惱を斷ぜずして涅槃を得といふが本願一乗の大悲である、論註に此云何不思議有凡夫人煩惱成就亦得生彼淨土三界業畢竟不牽、則是不斷煩惱、得涅槃分、焉可思議、是實に煩惱具足の凡夫に對する他力悲願の横超の金剛信である、されば如何程煩惱多くとも之を心配せずして悲願を信せよ、之を心配して、自ら喜ばんとするは雜修雜毒である、喜ばれぬものを、かねてしろしめしたる選擇本願は、信せず居ら

い、自然と多念に及ぶか後念相續である、即ち一念の繰返しが多念である、併し後念に於て此氣付きは自然にあらはるゝのである、一念開發の時に此點に氣を付けることが最も肝要である、

また淨土へいそぎまいりたきこと、ろのなくて、いさゝか所勞のこともあれば、死なんするやらんとことろぼそくおほゆることも煩惱の所爲なり、久遠劫よりいままて流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、いまだむまれざる安養の淨土はこひしからずさふらふこと、まことによく／＼煩惱の興盛にさふらふにこそ、なごりおしくおもへとも、娑婆の縁つきてちからなくしておはるときに、かの土へはまいるべきなり、いそぎまいりたきことろなきものを、ことにあられみたまふなり、これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存知さふらへ。

『歎異鈔』は思想に於ても文章に於ても至れり盡せりと云ふべきである、第二章の如き心に殘る殘なく絶對の信念を披露し、第七章の如き簡潔に力強き信を宣べ、十三章の如き異解者に向て縦横に一寸餘地なきまで言ひつめ、結文の如き懇切に丁寧絶對の信相を描きて僅の遺憾ない、此章の如き如何にも人情の微と真相とを同情を以て寫されたもので、何人も首肯せざるものはあるまい、殊に此章十六章結文の如きは文章に一種の潤澤ありて、而も少しも詩的想像に陥らず、信仰の真情を直寫して一片の浮泛の氣なきは實に眞面目にして美はしき聖教である、偕前節の如く此節も亦一念にも後念にも通ずる、一念としては世の無常に感じて未だ欲生心を生ぜざる

れぬ、こゝを『御一代記開書』に曰く、

愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚のかずにいることをよろこばず、眞證の證にちかつくことをたのしみますとまふす沙汰に、不審のあつかひどもにて、往生せんするかすまじきかなんと、たがひにまふしあひけるを、ものこしにきこしめされて、愛欲名利もみな煩惱なり、されば機のあつかひをするは雜修なりとおほせさふらふなり、たゞ信するほかは、別のことなしと仰られ候なり、往生せんするか、すまじきかなんか考ふるは本願を信せぬ有様である、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりとしられていよいよたのもしくおほゆるなり「よろこぶべきことをよろこばぬにて往生はいよいよ一定とおもひたまふべきなり」といふは即得往生の心持である、こは次の節にて詳しく辯ずる。

偈一寸注意してをくべきは已上述べたるは一念の信心につき其信相をかきたのである、即ち自力を喜ばんと企つるも無効である、他力の悲願をきいて往生一定の思に住するのである、然るに此一念に於ての味が後念におきて繰返さるゝことがある、たとへば、求道者が大なる實驗によりて非常なる踊躍歡喜の状態に入ることがあるが、動もすれば、再び已前程に喜べぬことがある、其時もの如く喜ばんと企て、力味力起せば起すほど喜べぬやうになる、其時は喜ぶべき心を押へて喜ばせざるは煩惱の所爲なりといふ點に氣を付けねばならぬ、此章でも信卷末の悲歎の文も寧ろ後念の有様につき述べられた語氣である、されど後念と一念とは別物ではな

有様である、後念として悲歎の文の所謂眞證の證に近くことを快まずである、信卷「本の欲生心の釋が信樂釋と同様に微塵界有情流轉煩惱海、溺没生死海、無眞實廻向心、無淨廻向心」といふのが久遠劫より流轉せる苦惱の舊里はすてがたくして欲生心の生ぜざる有様である、そこで我國に生れんと欲へといふ如來招喚の勅命、大悲廻向があるのである、いそぎまいりたきことろなきものをことにあられみたまふ大悲大願である、是によりて初めて如來に歸する心が起るのである、成就の文に至心に廻向したまへり、彼國に生れんと願すれば、即ち往生を得といふが此點である即ち往生決定と存じ候へと云ふのが此即得往生である、親鸞聖人が十九歳の時磯長御廟の靈告を蒙られたといふ文に、諦聽諦聽我教命、汝命根應十餘歲、命終即入清淨土、善信善信眞菩薩とある、既に九歳の時無常を感ぜられし上に、此時一層其感動を強められ、十年を経て益々其年に至りて殆んど身の置き所もなく苦惱せられたといふことである、之が動機となりて遂に二十九歳の春、聖覺法印の導によりて法然聖人に遇ひ、選擇本願を聞きて願生彼國即得往生の安心を得られた、私は聖人が即得往生を解して信心歡喜の一念に往生すべきものと定まること、仰せらるゝも決して偶然でない、是れ聖人の實驗である、靈告の命終速入清淨土とあるは此二十九歳入信の一念である、『愚禿鈔』に本願を信受するは前念命終なり、(即入正定聚之數文)即得往生は後念即生なり(即時入必定文又名必定菩薩也文)他力金剛也と應に知るべし、便ち彌勒菩薩に同じとあるは何となく靈告に合する様に思はれる、特に眞菩薩の文字は眞の佛

弟子、便同彌勤菩薩の釋を促し來つたやうにも思はれる、殊に法然聖人より親鸞聖人へ御附屬の文には彼佛今現在成佛當知本誓重願不虛、衆生稱念、必得往生、とある、すなはち本願の虚しからざるを信受する一念に必得往生と定まるのである、こゝを「これにつけてこそ、いよいよ、大悲大願はたのもしく往生は決定と存知さふらへ」との仰せられたのである。

已上は一念につけて云ひたるものなれど文章の様子にては後念につきて述べられたものらしい、眞證の證に近くことを快まずと同意である、併前節にて辨せし如く一念も多念も畢竟同様である、「いさゝか所勞のこともあれば死なんするやらんと、こゝろばそ、おほゆることも煩悩の所爲なり」とは何人も實驗する所である、蓮如上人が「法然上人の仰には淨土を願ふ行人は、病患を得てひとへにこれをたのしむとこそおほせられたり、しかれども病患をよるこぶこゝろさらにもておこらす、はづへし、かなしむべきものか」とあるも同様である、如何に信念決定せし人なればとて、命終をいそぐものはない、如何程長命を爲したりとて速く淨土へゆきたいとの感想を抱くものはない、此娑婆にあらんかぎり我等は煩惱の塊、妄念の凡夫である、娑婆の縁つきて力なくして終るとき彼土へはまゐるべきなりとは實に貴き御教化である、亦こゝでも源信和尚の横川法語を想起することである、曰く、

信念淺けれど本願深きが故に、懇めは必ず往生す、念佛ものうけれども、唱れば定めて來迎に預る功德莫大なり、此故に本願に逢ふ事を喜ぶべし、妄念はもとより凡夫の地體なり、この故に妄念の外に別の心はなきなり、臨終の時

までは一向妄念の凡夫にてあるべきぞとこゝろえて、念佛すれば來迎にあづかりて、蓮臺に乗する時こそ、妄念をひるがへしてさとり心の心となれ、妄念のうちより申出したる念佛は濁りに染まぬ蓮の如くにして、決定往生疑なし、南無阿彌陀佛

實に我等は臨終の時まで一向妄念の凡夫である、たとひ即得往生の安心に住し、俱會一處の樂を期するとも、決して命終を急ぐものはない、私は親を初め多くの人の最後に於て自ら深く感じつゝある點である。「口傳鈔」に曰く、

まづ凡夫はことにいつてつたなくちろかなり、その奸詐なる性の實なるをうつみて賢善なるよしをもてなすはみな不實虛假なり、たとひ未來の生處を彌陀の報土とちもひきためたと淨土の再會をうたかひなしと期すとも、ちくれきたたつ一旦のかなしみ、まともる凡夫として、なんぞこれなからん、なかんづく嘔吐流轉の世々生々の芳契今生をもて輪轉の結局とし、愛執愛著のかりのやど、この人界の火宅出離の舊里たるべきあひた、依正二報ともにかてかなごりおしからざらん、これをちもはずんば凡衆の攝にあらざるべし、(中略)たとひ妄愛の迷心深重なりといふとも、もとよりかゝる機をむねと攝持せんといてたちて、これがためにかまうけられたる本願なるにより至極大罪の五逆謗法等の無間の業因ををしとしましまさざれば、まして愛別離苦にたへざる悲歎にさへらるべからず、云々

いとまゐりたきこゝろなきものを、ことにあはれみたまふなりとは如何にも甚深の佛意である、或人は非常に無常を

感じて苦惱せし時、このいとまゐりたきこゝろなきものを、ことにあはれみたまふといふ一句で信仰に入りた人がある、ことにの一語に非常に感じて御慈悲を喜ばれた、我等は一刻にても生死海に止りたきとのみ考へて居るのなれば如何にも特に大悲の憐愍を蒙るのである、ことにの文字と對照していとまゐりの文字が如何にも意味が深い、速かに親の家庭に歸る心のなきものを親は特に憐愍したまふのである、此いとまゐりの文字は前にも度々出てある、第四章には淨土の慈悲といふは念佛していとまゐり佛になりて大悲大慈心をもてちもふがごとく、衆生を利益するをいふべきなり、第五章にもたゞ自力をすていとまゐり淨土のさとりをひらきなば六道四生のあひた、いづれの業苦しづめりとも神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと、かくいつても淨土のさとりをひらき佛になるときいとまゐりの文字のあるのは決して意味なしてはない、是實に本願他力の淵源を示されたる眞鸞大師の論註卷末の他利他の深義及び三願の證が速の一字より來りてある、曰く

今言速得阿耨多羅三藐三菩提。是得早作佛也。(中略)問曰
有。何因緣言速得成就阿耨多羅三藐三菩提。答曰論言修五念門行、以自利利他成就、故、然覈求其本阿彌陀如來爲増上緣。

と云ひて所謂他利他の釋がある、是實に親鸞聖人が宗師顯示大悲往還廻向「慈愍弘宣他利他深義」と仰嘆措かざる甚深の意義にして畢竟如來大悲の願力を以て我等を利益したまふ淨土眞宗の骨目、如來廻向の大德音の淵源である、而して次の文に

凡。是生彼淨土、及彼人天所起諸行、皆緣阿彌陀如來本願力。故、何以言之、若非佛力、四十八願便是徒設。今取三願、用證之、(十八願)緣佛願力、故、十念念佛便得往生、得往生故、即免三界輪轉之事、無輪轉故、所以得速證也。(十一願)緣佛願力、故、住正定聚、故、必至滅度、無回伏之難、所以得速證也。(二十二願)緣佛願力、故、超出常倫、諸地之行現前、修習普賢文德、以超出常倫、諸地之行現前、所以得速證也。以斯而推他力爲増上緣、得不然乎。

三願の證は畢竟いとまゐり淨土へまゐらしめんとの如來増上縁である、是我等かいとまゐりたき心なきを特に憐みたまひて起したまひし本願である、あはれみたまふと云ふは信卷末の矜哀斯一治、憐憫斯一療との意である、此三願こそ淨土眞宗の源、教行信證の根本である、これにつけてこそいよいよ、大悲大願はたのもしく往生は決定と深く仰信し奉る次第である。

踊躍歡喜のこゝろもあり、いとまゐり淨土へまゐりたくさふらはんにば煩惱のなきやらんとあやしくさふらひなましと云云。

踊躍歡喜のこゝろなきこそ妄念凡夫の本性なれ、いとまゐり淨土へまゐりたき心なきこそ煩惱隆盛の衆生なれ、もし歡喜のこゝろもあり、いとまゐり淨土へまゐりたき心あらば、煩惱なきかと却て怪しまねばならぬ、若し煩惱なくんば佛の本願も空しくおはしまさん、何んとならば如來の本願は罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけたまはんとの思召である、かくて此章は第一

章に示されたる誓願不思議の御力の極、罪惡救済の大悲の底を盡されたる『歎異鈔』の蘊奥を剴切に我等に開闢したまひた、是眞に阿闍世王が伊蘭心中に無根旃檀の信を生じたる事實にして嘗て本講義開卷に擧げたる『教行信證』總序に然則淨邦緣熟、調達闍世、興逆害、淨業機彰、釋迦韋提選安養、斯乃權化仁、齊教濟苦惱群萌、世雄悲、正欲惠逆誘闍提、と仰せられたる所以である。

五月雨

増田 八風

かへり見し柳け多し然れど流れに舟の綱とよにけり
湖みたる菅葉にそぐ夕立にはじめて雨を我れ知りにつけり
我が見たる人はまことの人のして唯我が見たる人にはあらず
浮き沈む鴨のみにて飛び立たむ鳥見らるべしありぬ池かな
雨ふればいよし生ひ添ふ庭の草の丈はのぶれどいや立ちかれつ
親知らぬみなし兒もあはれしかれども子なき廻り向さらにははれ
わが胸に忍さしれし事なくてひとの痛みを誰か知るといふ
かはきたる心の外に泉をし求むとしたる嗚呼その涙
いや遠く漕ぎ出て来ればかへり見え燈火波に見えかくれずも
夏の日暮るれば一つ目残るともしに集ふ我が思かな

秋思

増田 八風

のどけき春は過ぎ去りて
今は影さへ止らず
笑める花見し所いま
身にしむ秋に胸せまる。
叢林分くる秋の風
さながら泣くが如かるに
死する自然のなげく聲
凋む梢にわたるなり。
一年去りぬ實に疾しや
吾れ又更に年老いぬ。
森のさゞめき問ひけらく、
汝は幸を得たりやと。
奇しくも森のさゞめきは
いたく吾が胸さしにけり
秋さり来れば木々の葉と
望凋まぬ年なきを。
(レーナウ)

時報

大日本佛教青年會夏期講習會

同會は其第十七回を不忍池辨天内に七月九日より同十八日まで開會せり、講師は笹本、前田、勿滑谷、高島、本多、多田、本多、萩原、島地、常盤、佐々木、釋、山田、等の諸師なりき、近角も亦本會に出席せんがために一旦四國傳道より態々歸り來りて、六十七七八の三日間、他力信仰の淵源につきて講話せり、熱心なる青年各學校より集りて眞摯に聽講せり、十八日午後には閉會式あり、幹事朝倉曉瑞氏の挨拶、藤岡勝二氏の閉會の辭、近角初め來會者の感話あり、貞水の講談眞壁平四郎は場所にとりて適切なりき、大宮孝潤氏印度旅行談をなし、王舎城 嵐毘園の古瓦片を示されたるは、人をして三千年前の往昔を懐かしめたり、不忍池中の荷葉涼を送りて、坐ろに清淨界中に遊ぶの思あらしめたり、一色一香無非中道、嗚呼何事も大悲の恩寵たらざるはなし、南無阿彌陀て佛。

第二夏期傳道

本年夏季は三期に分ちて傳道することとなり、第一期は感謝欄に記せる四國及び神阪地傳道なり、第二期は往路横須賀に立寄りて、直に廣島及其地方、姫路及其地方に傳道し、歸路郷里及長濱に立寄りて、歸京せり、二十日午後東京出發、其夜横須賀に開會す、同地は昨年已來例月求道會を開きしが、近角差支多きため常に其希望に背きつ、今日に至れり、信仰を求むるの青年を初め、求道者堂に

嘆 咏

滿つ、同地は人生問題より信仰に心掛くる人多きこと、恰も關西に於ける神戸と全く趣を同じくす、

同夜横須賀を出發して、東海道及び中國の山水を送迎しつゝ、二十二日朝廣島に着す、偕行社に於て夏期講習會を開く、昨年此會に出て、本年も亦出席す、菅瀬芳英師の導きによる宿縁深厚なりといふべし、講題は十七憲法也、高楠順次郎氏亦前日より出席講話せらる、眞鍋中將を初め、同地の知名の紳士皆出席し、道を求むるの青年及び信徒常に滿堂、五日間信仰問題の面目を説き、大悲の恩徳を仰ぎ二十六日終了、同譯出發奥海田京極逸藏君の寺に於て即夜より開會、翌日終日、二十八日朝迄、法話及講話を爲す、質樸なる老若法悦極なし、同日午後西條道友會に於て開會、從來既に業に開法すること多かりしが、近時信仰を求むること切なるため、青年獲信するものありて、中には竹原まで同行するものありき、三十日竹原に移る、同地は頼山陽の生地、前田慧雲師先づ在り、頼氏は入信歎喜の人、山内、中井兩氏と共に希有最勝人也、同氏本家につきて山陽先生母を奉じて高瀬を下り、茶山の黄葉夕陽村を訪ひ、竹原に墓を展し叔父と共に酌む等の諸作を見て、遊子の情千古相照の感あり、二日間鐵仰、人皆満足、三十一日出帆尾道より乘車姫路に向ふ、一日曉覺むるの時、播州瀟灑なる風景は既に窓外にあり、味夾姫路に着し、興地、兩近、藤芝等の諸友、并に青年會員に迎えられ、赤松樓に着すれ、齒田宗憲師先づ在り、同日大谷派別院本徳寺に於て開會、予は宗教と道德の題目につきて六日間講話す、一總論、二、人生と解脱、三、小乗と大乘、四、自力と他力、五、行と信、六、眞滯と世覺、即十七憲法の精神を秩序的に講述せし也、開會中綱干有志の招聘に應じて、二日出張講話す、同地に班鳩寺あり、これ聖徳太子勝鬘經講義の後、布施として賜はらし水田三原六十町を法隆寺等

毎月一回一日
發行九月二日
八號發行
價一冊十五錢
稅共九十錢

第一卷

アカア

第八號

發行所
東京駒込千駄
木町五十番地
根岸短歌會

タンヌンチ才作ち
あるか
狭野茨園譯
アドリアチック海上、暴風雨に漂ふ
一帆船の悲劇を描く。伊太利情熱的
作家の深刻の筆致、悲惨の光景活躍
卒讀に堪へざらむ。

詩歌製作の衝動

- 生死苦樂の問題
- はかなき解脱の一瞬間
- 詩人特有の心理作用

評論

鹽山

- 天才論
- 悲劇論
- 實世間生活及富財に對する藝術家の態度

和歌入門

三井甲之

万葉集中の民謡

三井甲之

テゲ1 吾を泣かしめよ

鹽山 譯

テゲ1 秋の夜の夜

鹽山 譯

俳壇評論

大須賀乙字

其他同人の俳句短歌寫生文等

誌雜刊月

靈

光

第二年八號(八月一日發行)要目

- ◎ 内部の温味◎ 鼎中沸々
- ◎ 悲歎の事ある時は此言を思へ
- ◎ 親鸞聖人の同情
- ◎ 人の務め
- ◎ 嘆 咏
- ◎ 小説行く水
- ◎ 如來永劫の修行
- ◎ 自督の記
- ◎ 本願の謂れ 近角常觀◎ 親の愛と目光(留岡幸助)◎ 余の守れる三教訓(高木兼寛)◎ 斯くの如き育兒法は失敗す(清風生)
- ◎ 働けば壯健になる(嘉悦孝子)◎ 彙報其他

本誌より菊版型に改め紙面を擴張し内容を充實せしめ以て修養信仰の良指針家庭の好同伴たらしめんことを期す諸兄弟の御購讀を希ふ

發行所

神戸市中山手通四丁目
振替口座一〇五一〇番

靈光社
京都油小路御前通上ル
振替口座四一三番

賣捌所

興教書院

振替貯金口座加入廣告

本所事今般振替貯金口座に加入仕り候。就きては此口座法にて御送金の時は、途中紛失の憂無きのみならず、登記料二錢の外は凡ての料金を要せず、且つ無料通信の便利有之事に候へば、爾後本所宛御送金の節は總て此の便法御利用相成り度く、此の段謹告仕り候也。

口座番號

第壹六六九六番

但し、登記料金二錢は必ず御加算願上候

東京市本郷區
森川町一番地

求道發行所

規定

- 一 本誌は毎月一回一日發行とす
- 一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ
- 一 郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
- 一 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一 凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
- 一 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
- 一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一 本誌定價左の如し

一 部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

● 廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

明治四十一年七月廿八日印刷
明治四十一年八月一日發行

發行所 求道發行所

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力

東京市本郷區森川町一番地
(振替口座一六六九六番)

大賣捌所

東京市神田區表神保町
東京 京 堂

前號要目

求道

◎念佛

感謝

◎九州傳道◎一皆佛恩◎四國傳道の往途

講話

◎阿彌陀佛大願業力（『執持鈔』講義の一）

近角常觀

一 第一章の大意

二 第三章

告白

◎愛兒の夭折は是れ大悲の善巧

立石仙六

雜錄

◎故中村候補生のキャンデー寺院參拜記

◎中村長谷部兩候補生哀悼書簡

窪田海軍主計中監
光井陸軍中佐

一

慶歎

◎眞宗慶歎

十三 善惡攝取

近角常觀

◎再生（長詩）

歎歌

◎思ふともなく（長詩）

時報

甲之風

◎不年の夏期講習會◎本年の夏期傳道◎其後の求道學會